

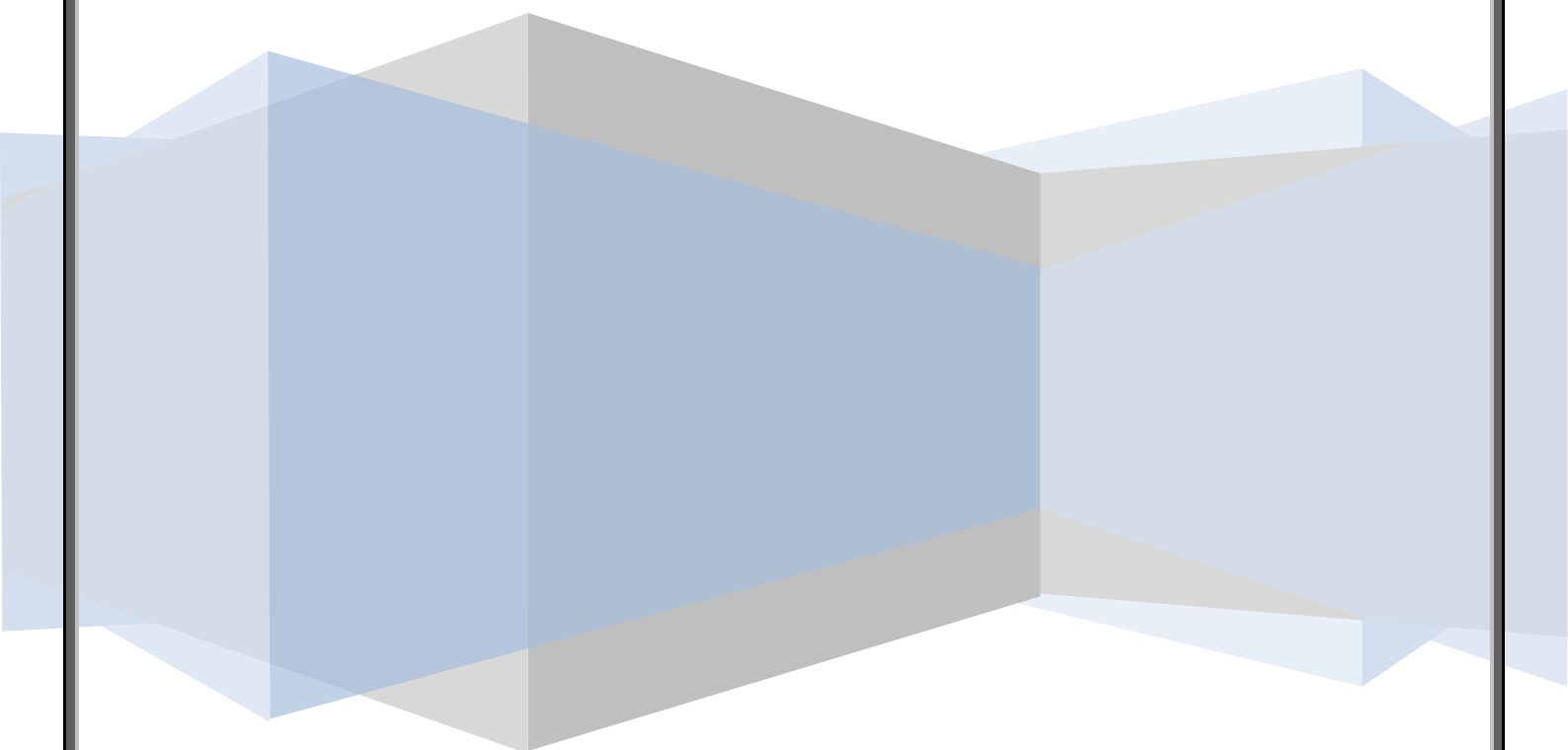
2010 年度 冬学期

と 治 II (内 山 融)

試験対策プリント

2011/2/4

作成 : 文 1 ・ 2 6 組 松本 祐輝



2010 年度 冬学期 政治Ⅱ(内山 融 教員) 試験対策プリント

目次

授業ノート

2010 年度の内山教員の講義録です。参考書とともに活用してください。

用語説明集

試験の形式に対応した用語の説明です。重要なところにはマーカーが引いてあります。

概略まとめ

一つ一つの概念を簡略化した形で掲載しています。参考にしてください。

前書きは以上です。試験での健闘を祈ります。

序章 政治学とは何か

- ・政治学 (広義) 政治思想史…アリストテレス～ルソーetc

政治史…いわゆる政治の過程・歴史

行政学など

(狭義) 政治理論

現代政治分析

⇒ここでは広義の政治学について扱う

ー政治学の特徴：実務と学者の関連性が高い法学や経済学とは違い、学問と実体の距離が大きい

Ex. 法学者と法律家 VS 政治学者と政治家

※では政治学には実用的価値はない？

Ex. 権力について学んだからといって、権力を得る上で必ずしも有用となるわけではない

- ・政治学の意味

※現代政治分析だけではなく、政治思想史なども重要な理由

ー知的伝統・知的基盤を知らねば本質的な議論はできない

⇒政治学は、政治を見るための「目」を養うための学問だといえる

政治を考えるための道具…長期的には大きな実用価値を持つ

：人々が「目」を向けて主体的に政治に参加するようになれば政治社会の未来を変えられる(多分)

- ・政治学の方法論

政治学を表わす1語の英単語は存在しない

⇔political science / political theory etc 政治学は多様な意味合いを持つ

＝政治学は単一の「パラダイム」を持たない(パラダイム…模範的な理論体系)

※経済学なら需要と供給の均衡分析、など

かつては政治学にも体系性が存在した

政治思想史⇒政治史⇒政治原論

しかし、他の学問分野の理論を受容していったため、体系を失っていった

行動論：政治分析に心理学を取り入れる(ラズウェルなど)

社会学・経営学：官僚制・行政の研究に取り入れられる

経済学的・数理的理論：ゲーム理論などを政治に応用

⇒政治分析は方法的には豊かになった(数学分野から政治思想史まで)が、政治分析と政治思想史・政治史の関係が希薄になってしまった

- ・政治学のメリット…多様な角度から様々な手法で政治現象を分析できる

- ・政治学固有の領域：公共性

☆1 政治(politics)

(1)「政治」の定義

ex. 「日本の政治はダメだ」 経済とか社会とか景気とか

ここでの政治…政策によって社会の諸問題を解決する

「彼は政治的な人間だ」「教授は学内政治にご執心だ」

ここでの政治…統括的に社会の紛争を解決し秩序を作り出す

or 権力を求めて闘争する

①利益中心の見方：公的意思決定過程に関わる、人間や集団の行為や相互関係(政治過程)に着目する見方
→それぞれの利益の最大化を目指して、公的意思決定過程に影響力を行使しようとする個人や集団の競争的活動

ex. 農家が集団となって政策決定に圧力をかける

→①は多元主義の見方：多元的な利益集団がお互いの利益を求めて競争する

②権力中心の見方

「政治とは、権力の形成と分配である」 ラズウェル

「政治とは、コントロール、影響、権威を多くの程度において含む人間関係の持続的パターンである」
…ダール

③ある社会に対する「価値の権威的配分」 イーストン

権威的…その社会の大部分の人によって通常、「従わなければならない」法則的なものと受け取られるような決定

ex. 法律の制定、予算の策定

→以上の①②③は政治が“どこにでもあるもの”ととらえている

…実際に政治がさしているのは政府によるもの

この間には何の違いがあるのか… 公共性

④公共性を重視する見方…ある社会の構成員全員に影響する

・クリックの考え

「政治学」：社会全体に影響を与える利害と価値をめぐって生じる紛争についての研究であり、どうすればそれを調停できるのか、についての研究

「政治」：与えられた統治単位内での諸利益の対立を、それぞれの利益が共同体全体の福祉と生存に対して持つ重要性に応じて、権力に参加させつつ、調整するところの活動

※公的権力と私的権力

ポリス…公的集団 家族…私的集団

一政治＝公共の利益を実現するものである

・佐々木毅

政治：自由人からなるひとつの共同体の中での公共的利益に関わる権力を伴った、多元的主体の活動

④での政治の定義

公的権力によって、多元的な利益・価値を調整・統合し、公共の利益を実現する活動

利益・価値…自分本質な利益だけでなく、精神・道徳的価値も必要

調整・統合…利益をまとめる受動的な調整と、変化を与えて能動的に利益を引き出す統合

※模範的概念と叙述的概念…概念と視座構造

概念の定義は規範的行為→現状の認識・批判・改革へ

特定の視座に基づいて現実を切り取る

→何を重要化と考えることによって、見方が異なってくる

…どのように政治を定義するか＝どのように政治があるべきだと考えているか

・別の定義を行う＝別の角度から見る

→見逃していた現実の新たな側面が引き出せる 定義≡価値判断

・新たな概念を提示する＝人間に働きかけて方向性を与える

概念の批判…実践的な行為

(2)「政治」と「行政」

政治学≡行政学

☆主体に着目

政治…政治家による活動

公選職(国会議員など)

→政治家で構成されている機関の活動

行政…官僚(行政官)による活動

任命職

→官僚で構成されている機関の活動

☆機能に着目

政治…諸利益・諸価値の調整・統合

=政策の決定(予算・法律など)

行政…調整・統合の結果を実現

=政策などの立案・執行や統制

←以上の見方は相対的な価値観に過ぎない…いわば理念型、厳密な区別は難しい

※法律を細部まで決めるのは行政、その裁量を決めるのも行政

→利益の調整も行う機能を有する

☆政官関係(現代の日本政治の研究の1テーマ)一政党優位か、官僚優位か？

・官僚優位論：明治期以降からの体制が継続していると主張(1950年代)

・政党優位論(日本型多元主義論) 1980年代から

族議員の活動…55年体制の安定により顕著になる

特定の政策分野に精通する議員で、関連官僚との連携をはかることも

ex. 厚生族、建設族

→官僚が作った政策の原案に一定の修正を加える(利害調整・利益誘導)

⇒官僚制にのっかっているだけで、決して政党優位ではない！

※政治的官僚と官僚的政治家

☆2 政治システム論

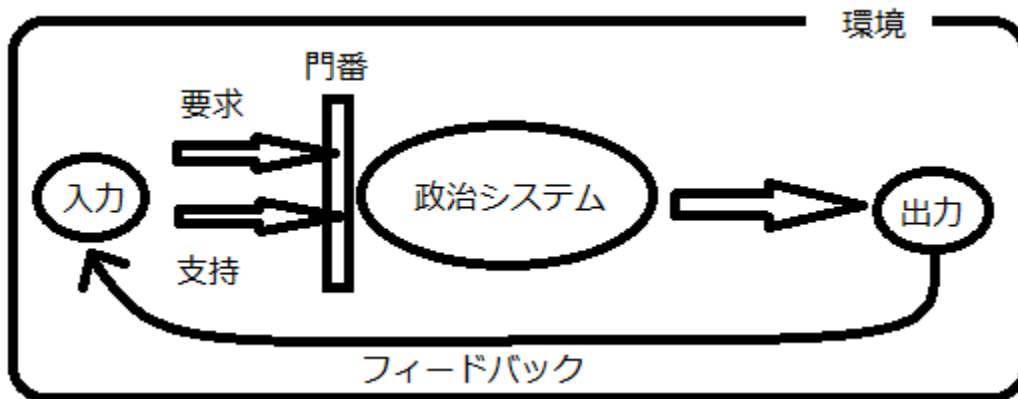
1. イーストンの政治システム論(1953)

: 政治をモデルとして捉えることによって単純化し、理解を深めようとする手法

・政治システム: 政治的と呼ばれる具体的な社会活動の、統合的に関連付けられた諸側面を確認するために設計された分析的器具(科学的)

※システム…相互に関連する諸要素によって構成された統一的全体

(以下、図式の解説)



・環境 社会外環境: 国際政治システムなど国際的なもの

社会内環境: 生態系、文化、社会 etc.

⇒これらは外部システムとして影響しあう

・政治システムの3層構造

1. 決定者(authorities): 実際では政府にあたるもの

2. 体制(regime): 要求の解決・決定が行われる方式を定めた一定のルール

ex. 日本の場合法律は国会で制定されるなどといったルール

⇒民主主義体制、独裁体制などがこれにあたる

3. 政治的共同体(political community): 国民などがこれにあたる

※決定者・体制の変革が起きても政治システムは存続しうるが、政治的共同体はシステムの崩壊に直結する恐れがある

・入力: システムを何らかの形で変革・修正し、影響を与える

要求…問題の処理・解決を求める

⇒決定者により行われるべきだという意見の表明でもある

あまりにも多いと過負荷に陥り、支持の低下を招く

←要求をふるいにかける仕組みが必要…ゲートキーパー

: マスメディアや政党、利益集団が要求の変形・整理を行う

支持 一般的支持: 政府それ自体、憲法それ自体への支持など、個々の出力に関係なく、忠誠や愛情による支持 EX. 愛国心

特定支持 : 具体的な政策に対する支持

⇒システム維持には一般的支持が不可欠

一般的支持をあげるには、国民の政治的社会化が必要

* 政治的社会化…社会の規範・価値観を習得していくこと

Ex. 教育を受けたことによって、現行の政治システムについて正当性を感じるようになる

- ・出力：価値の権威的配分を意識的に行う(政策の実現など)

- ・フィードバック：出力のもたらした影響を認識するプロセス

Ex. 5兆円の補正予算(出力)

⇒どれだけ役に立ったのか？(フィードバック)

①システムそれ自体と環境の現状についての情報入手

②構成員の支持と要求についての情報入手(世論調査など)

③出力の効果についての情報入手

⇒これらはシステムの入力に変化をもたらす

Ex. 5兆円の補正予算(出力)⇒どれだけ役に立ったか？(フィードバック)

役に立った…支持↑

役に立たなかった…支持↓ などのように次の新たな入力に影響

- ・フィードバックの効率や感度はシステム維持に影響を与えるといえる

- ・イーストンの政治システム論への批判

- ・政治システムの存続を重要視しており、現状維持的指向が強い

⇒保守的な理論であり、独裁制を肯定することにもなると批判

- ・システムと環境との関係を重視

⇒システム自体の内部構造を考慮せず、政治体制の変化を軽視していると批判

2. サイバネティクス論(ドイッチュ)

⇒あらゆる組織はコミュニケーションによってコントロールされているという観点

- ・コミュニケーションによって自己制御を目指す…サイバネティクス論

※サイバネティクスはガバメントと同じ言葉を語源とする(舵取り)

- ・政治は権力の問題というよりも操縦の問題である(steering)

⇒コミュニケーション

以下、フィードバックに焦点を当ててこの理論を説明する

- ・フィードバック(以下FBと略す)による学習と自己制御

- ・正のFB…FBされた情報が最初の行動を増幅する(ポジティブFB)

Ex. 民衆の不満⇒デモ⇒政府による抑圧⇒不満の増加

…限度を超えるとシステムの崩壊を招く恐れがある

- ・負のFB…FBされた情報が目標の達成に向けてシステムの行動を変更・修正する

①目標追求フィードバック…手段のみ変更：単調な学習

Ex. 5%の経済成長を目標とする⇒補正予算を組む

②目標変更フィードバック…システムの目標そのものを変更させる

Ex. 5%↑を目標としたが、うまくいかない

⇒2%の経済成長に加えて社会福祉の充実を目標とする

②のほうが、システム内の諸要素を再調整しなければならないため、やや複雑

価値について、システム内外の対立を通じて自己変革が行われる

Ex. 経済成長目標⇒オイルショック・環境問題⇒国民生活・環境対策を目標に

※複雑な学習…政治システムの成長につながる

- ・サイバネティクス論への批判
 - ・エリート主義的、テクノクラシー的な色彩が強い
 - ⇒システムの全体性を重視しており、権力などを軽視している

※ここまでの政治システム論

1. イーストン…政治を科学的に捉える
2. ドイツ…コントロールを重視(正と負のFBを主に扱った)

3. 構造機能分析と政治文化論(ガブリエル・アーモンド)

⇒構造機能分析を政治システム論に応用

☆構造機能分析…あるシステムにおいて、いかなる構造がいかなる機能を担っているかを分析

- ・政治システムの共通特性：あらゆる政治システムには政治構造が存在し、その構造では政治システムが発展するにしたがって分化が生じる

⇒発展により構造は分化するが、機能は同一 ex 古代王政と現代民主政

機能は複数…立法、司法、行政など⇒政治構造の機能は近代化に従って限定されていく

Ex. 古代：王が立法、司法、行政すべてを担っていた

近現代：立法は議会、司法は裁判所、行政は官僚など、限定的に分化

…特に欧米の政治構造が発展しているとされる

- ・基本的構造：6つに分かれており、構造と機能はそれぞれ対応する

- ①選挙民とコミュニケーション・メディア
- ②圧力団体(利益集団)：政府に圧力をかけるものを特に圧力団体と呼ぶ
- ③政党：マニフェストを用いて利益集約を行う
- ④議会：立法を担う
- ⑤政府と官僚制：施行・執行
- ⑥裁判所

- ・入力機能：上記のそれぞれの構造が担当。出力に関しても同じである

a. 政治的社会化と補充

政治的社会化：政治社会で一般的な価値を自ら受け止め、同化していく

補充：政治家や官僚の養成

b. 政治的コミュニケーション

：国民同士での相互通信、思考の政府への伝達、政府の思考の国民への伝達

Ex. 世論調査

c. 利益表出：政策を要望するなど、利益を政府に表明する

d. 利益集約：利益表出の段階で出てきた多様な利益を統合し、一定の政策の形に集約する

- ・出力機能

e. ルールの作成：法律の制定 …立法分野

f. ルールの適用：法律の施行・運用、予算の執行 …行政分野

g. ルールの裁定：法律との整合性を確認 …司法分野

※構造と入出力の対応関係

- ①選挙民とマスコミ…b 政治的コミュニケーション
- ②圧力団体…c 利益表出
- ③政党…d 利益集約
- ④議会…e ルールの作成
- ⑤政府と官僚制…f ルールの適用
- ⑥裁判所…g ルールの裁定

⇒aの政治的社会化・補充はシステム全体によって達成されている

☆政治文化論(アーモンド、バーバ) ←政治Ⅰの範囲を参考に！

政治文化：政治的对象に対する指向(意識)のパターン

- ・指向パターンには3つの次元が存在
 - 1. 認知：対象についての知識を持っているか
 - 2. 感情：好きか嫌いか
 - 3. 評価：実際の対象への判断・意見
- ・政治的对象は4つ存在
 - 1. 政治システム全体
 - 2. 入力対象：利益表出・集約を行う圧力団体・政党
 - 3. 出力対象：行政機構や具体的政策
 - 4. (積極的)政治参加者としての自己：ex. 無関心、関心

4つの対象への指向から政治文化を類型化

未分化型：すべての対象に非積極的 ⇒当時のイタリア

臣民型：1 政治システム 3 出力対象にのみ積極的…総じて受動的な指向
⇒当時の王政ドイツ

参加型：すべての対象に積極的 ⇒当時のアメリカ合衆国

*理想：臣民型と参加型の混合が非常に安定的

⇒市民が政治家に対して尊敬心・恭順性を持ち、
政治的对象すべてに積極的

⇒当時のイギリス：“市民文化”と名づけられる
イギリスの政治的安定性の理由のひとつになる

※政治文化論の問題点とその批判

- ・政治文化を個々人の意識にのみ集中しすぎ(意識されていない文化もありうる)
- ・類型が近代化の発展課題に対応：旧文化が近代化とともに発展するという前提
⇒イギリスやアメリカは政治的に発展＝近代化しており他国は近代化が遅れている or 他国も近代化
するとこのような政治文化に収斂していくという理論
- …この理論は必ずしも真ではないとして批判
Ex. ドイツは近代化してもイギリスのような政治文化にはならない

☆3 権力(power)

政治と権力…不可分の関係にある

Ex. 「Aさんは権力を持っている」…Bさんが望まないことをAさんは実行させることができる
(ここでは、権力についての様々な論点について扱う)

(1)代表的な権力論

①チャールズ・メリアム：現代政治学の父で、行動論の一派シカゴ学派のリーダー

「政治権力」(1934)：ミランダとクレメンダ

権力に関する現象を叙述することにより、権力の持つ特質を浮き彫りに

・権力の生誕と死：権力は集団の統合現象であり、集団形成の必要性や有用性から生まれる

Ex. 公共事業、治安の維持の必要から権力が発生

生誕要因①社会・諸集団の間の緊張関係⇒組織化された集団が必要

②パーソナリティ諸類型の存在⇒社会生活への調整と適応を必要とする

③権力の追求者や指導者たち⇒対立や紛争を調整することが必要

死の要因①集団間の不均衡

②パーソナリティ調整の失敗

③政治社会の基本的機能の実行の失敗

⇒社会構造の変化に権力が適応できない状態

・権力の表と裏

・表 ミランダ：賛嘆されるべき様々なもの

情緒や感情に訴えかける非合理的側面を持つ

Ex. 権力の威容を示したり、国民の愛国心を高めるもの

具体的には記念日・記念碑、国家・国旗、物語と歴史、示威行為

クレメンダ：信仰されるべき様々なもの

知性に訴えかける合理的側面を持つ

Ex. 権力に従うことを納得させるもの

政治権力が…

絶対的権力者による運営である＝王権神授説

卓越したリーダーシップの最高度の表現である＝毛沢東

ある形態の同意を通じて表現された多数者の意思である＝民主政

ミランダ・クレメンダ：権力を飾ることによってその安定をもたらす手段

⇒一般大衆を権力に服従させる働きをする

・裏 暴力、残忍さ、偽善、汚職、硬直政府

・権力の技術

知識：支配者は社会についての正確な知識を持つことが必要

報償：報酬をそれぞれの集団・個人のサービスの度合いに応じて与えることが必要

妥協：主張に固執せず懸命な妥協をする

正義と秩序の均衡：権威が過度に集中することを防ぐ、リーダーシップを具体的に示す正義(個人を
属する集団に適合させ、パーソナリティの内的統合を実現する)を貫き、秩序(人
間の行動を予測可能なものに統合する)を維持しながら両者に偏らない

…自分を犠牲にしてでも国民に尽くすという意味＝利他主義、を身に付けていなければ命令する
ことはできない

←権力によって、大衆に対しても自己犠牲の精神を引き出すことが肝要

「国家は今まで自分のために何をしてくれたのか、なぜ国家のために働かなくてはならないのか」と国民が思うようでは厳しい

②ハロルド・ラズウェル(政治Iでも触れている): メリアムの弟子

- ・権力そのものの分析
- ・権力を追求する人間(政治的人間)についての分析

1. 権力についての分析: 価値(value)に注目

権力関係: 「ある行為の型に違反すれば、その結果重大な価値剥奪が期待されるような関係」

Ex. 身体的自由を奪う、財産を奪う、名誉・地位の剥奪

ラズウェルの価値区分

尊敬価値: 権力、尊敬、道徳、愛情 ←精神的なもの

福祉価値: 健康、富、技能、知識 ←実利的なもの

⇒人間は様々な価値を追求する

- ・価値を手に入れるためには他人をコントロールすることが不可欠

: そのため価値付与、価値剥奪などを利用する

「ある価値を手段として、ある価値を手に入れようとする」

基底価値

目標価値

⇒上の8つの具体的価値が基底価値になったり目標価値になったりする

Ex. 富で権力を得る、権力で愛情を得るなど…64通り存在する

2. 政治的人間についての分析:

精神分析学の手法を応用して政治的人間のパーソナリティ確立の過程を研究

⇒幼少期の経験が影響している?

$p\}d\}r=P$

⇒個人的動機を公共の利益に置き換え、合理化する人間のこと

p: 私的な動機…「権力を追求したい」

←成長過程での価値剥奪に対する補完の手段

Ex. イジメられる、挫折を経験する(周囲から低い評価を受ける)

d: 私的動機の公的目標への転位…「政治家になる、総理大臣になる」

r: 私的動機の公的象徴による合理化…「公共の利益のため」

P: 政治的人間

※政治的人間の3類型(ラズウェル自身は劇化型?)

劇化型: 他人から注目を集め、情緒的反応を受けることに高い関心を持つ

⇒大衆を動員する扇動家向き(ヒトラーなど)

…親に問題を抱える家庭で育ち、子供は人の感情の動きを読み取るのがうまくなる

強迫型: 人間関係の処理が極めて窮屈(細部に非常にこだわる)

⇒他人に責任を転嫁しつつ、自分の権力拡大を試みる官僚向き

…裕福だが淡泊な家庭で育ち、子供は愛情と賞賛に飢えている。また物事を画一的に処理するようになる

冷徹型：自分の精神生活から感情が失われてしまったタイプ

⇒外交官、仲裁者向き

…感情を持たず、常に冷静・冷酷で無慈悲になりやすい

③ロバート・ダール：行動論(政治を科学的に分析)の中心的人物(イエール大学)

・権力の定義：「他からの働きかけが無ければ a がしないであろうことを、A が a に行わせることができたとき、A は a に対して権力を持つ」

…権力は数量的に測ることができると主張

$$M\left(\frac{A}{a} : w, x\right) = (a, x \mid A, w) - p(a, x \mid A, w) = p_1 - p_2$$

M：権力

x：行為 w：働きかけ p：確率

数式の意味：

A の a に対する権力

＝「A が w という働きかけを行った時に a が行為 x をする確率」

－「A が w という働きかけを行っていない時に a が行為 x をする確率」

Ex. ある教授の学生に対する権力

＝「学生がその教授の警告を受けて勉学に励む確率」

－「学生がその警告なしで勉学に励む確率」

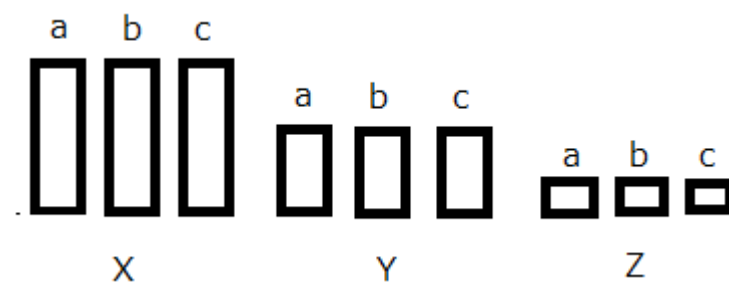
・現代の民主的社会における権力：誰が権力を持っているのか？

政治的資源の累積的不平等から非累積的・拡散的不平等へ

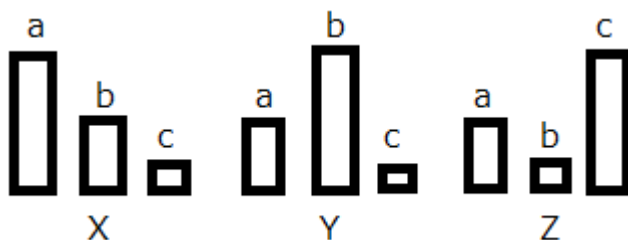
(政治的資源：関連、富、情報、伝統的地位など)

* 政治的資源を A, B, C の三種用意し、X, Y, Z の三人に分配すると考えると…？

・累積的不平等



・拡散的不平等



(拡散的不平等では…)

- ある資源に接近するのに有利な人は、しばしば他の資源に接近するのに不利

⇒古代王政のように絶対的に資源を抱える勢力は存在しない

- 他の資源が必要なくなるような影響力を有する資源は存在しない
- 個人であろうと団体であろうと誰でもある程度の資源は有する

⇒結論：多様な社会集団が、それぞれ異なった範囲で限定された権力を分有している

実際の政治においても政策分野ごとに影響力の許容範囲が異なる

⇒このような政治体制を多元主義(pluralism)と呼ぶ

※ダールの調査

政策決定のプロセスにおいて、「どのような案が誰によって提示され、参加者の動向がどうだったか、どの案が採用され、どの案が却下されたか」を様々な政策ごとに調べ、得点式に計算(非常に行動学的)

⇒最も高得点の者を権力者とする

(2) 権力の様々な見方(様々な権力観)

①実体的権力観と関係的(機能的)権力観：丸山真男(戦後の日本を代表する政治学者)

※具体例：あいつは〇〇円持っている、あの国は軍隊を〇〇万兵持っている

⇒そのような物理的な数字だけで権力は捉えきれぬのだろうか？

反証：子のわがままを親が受け入れる例…物理的要因では説明しきれない

- 実体的権力観：権力を、人間あるいは人間集団が『所有するもの』とみなす立場、すなわち具体的な権力行使の様々なあり方の背後に一定不変の権力そのものという実体があるとする考え方

Ex. 税金未納者に対して、『税務署が差し押さえを行う』

犯罪者に対して、『警察が公務を執行する』などの物理的強制力

⇒価値についての概念に近い(富・情報などもこれにあたる)

学者では、価値の概念を重視したラズウェル、軍事力を重視したラズウェル、生産手段を重視したマルクスなど

《問題点》

B(被行為者)がA(行為者)をどのように認識(評価)しているかによって権力の大きさが変わってくる

⇒なめてかかる、過剰な警戒、尊敬心など

⇒主観的なイメージ(価値のスケール)が重要で、客観的な情報だけでは足りない

※反例：キャスティングボード…状況しだいでは実体的権力がなくとも権力を有するようになる

- 関係的権力観：権力を行使する側とされる側の関係に注目

⇒権力を、具体的な状況における人間あるいは集団の相互作用において捉える

Ex. AがBに対してある命令をし、Bが従う…AがBに対して権力を持つ

従わなかった場合…Aがどれだけ実体的な強制力を持っていたとしても権力はない

※実体的権力観が「あいつは金を持っている、だから権力がある」という発想なのに対して、関係的権力観は具体的にどれだけの機能や効果を発揮するか、という発想

学者でいうならば、ロバート・ダール

⇒結論として、二つの権力観を場合に依じて使い分けることが重要

・歴史的状況と二つの権力観の結びつき(親和性)

* 体制が固定的で、階級的あるいは社会的流動性が乏しい国ないし時代

⇒実体的権力観が重視される

※階級的流動性…貧乏人が金持ちになるなど

社会的流動性…上記の流動性に加え、農民が都市生活者になるなど

実体的権力観は、政治権力の専制性や暴力性を肯定する考え方と結びついてきた

* 政治権力による社会的価値の独占性が相対的に低く、コミュニケーションの諸形態が発展し、社会集団の自発的形成とその間(及び国家と諸社会集団の間)の複雑な相互牽制作用が活発に行われているような国ないし時代

⇒関係的権力観が重視される

Ex. イギリス 王権が縮小し、社会集団が発生

関係的権力観は、立憲主義や民主主義の考えと結びついた

※AがBに命令をする際、内面的な意味づけを行っている場合、安定的な権力関係(支配関係)が成立

⇒何度も発生する権力となる

② 1次元から3次元的権力観(スティーブン・ルークス)

Ex. 民主党と自民党が対立

⇒どちらの考えが通ったか?で権力関係を捉えることが多い

しかし、対立が起こっていない状況でも権力が発生することがある

そこで、ルークスは権力を3つに分類

これまでの権力観を1・2次元的権力観として整理し、それでは不十分だとして

新たに3次元的権力観を導入するという論法

* 1次元的権力観(多元主義者の権力観 Ex. ダール)

相互作用の結果としての権力を重視

・決定作成において行使される権力

・ある争点をめぐって決定が作成される際の行動に着目

Ex. 年金をめぐって自民と民主が対立…政策決定で行使される権力に着目

Aに利益となる決定…Aが権力行使

Bに利益となる決定…Bが権力行使 ⇒このように捉える

・決定作成においては、観察可能な紛争が付随することが前提

観察可能な紛争…外から見て対立しているとわかる状況

政治参加を通して行われ、明確な政策選好が行われる

⇒1次元的権力観: いわば当たり前の権力を示している

* 2次元的権力観…1次元的権力観では捉えられないものを補完

・争点が政治の場で浮上しないように抑制する行為も権力の行使にあたる

⇒「非決定」の作成

Ex. ある争点が取り上げられることによってAには利益となるがBには不利益となる場合

…取り上げられなければBによる権力行使にあたる

- ・潜在的争点が顕在化することを阻止するために決定が回避されることに着目

⇒決定作成の範囲を限定する

Ex. 大蔵省の組織改変：当初は大蔵省の権力が強く、主計局の機能や金融に関する権限を外部に移したりするという議論が浮上しないように権力行使されていたが、90年代後半になって大蔵省の権力が弱まったため財務省への組織改変への動きが現れはじめた。

- ・諸利益の間の観察可能な紛争が付随

⇒明確な政策選好と準政治的不満の表明の中具体的に示される利益

ダールのような1次元の権力観では不満自体が争点化されなかった可能性がある

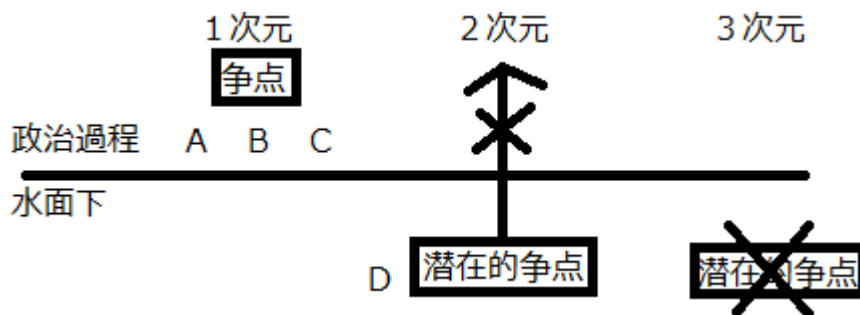
←そもそもダール自体が人間の具体的な行動に着目し、科学的に分析する行動論的な立場に立っているため

…顕在化されない争点を見逃してしまう危険あり

- ・非決定作成を行使された集団は、苦情によって利益を表明

⇒政治参加できた人とできなかった人の間の利益の紛争は観察可能である

…その点において1次元の権力観と軌を一にする



* 3次元の権力観

- ・2次元の権力観も行動論的である…争点の顕在化の抑止もひとつの決定(行動)

⇒個人の行動に限らず、制度上の慣行なども潜在的争点を排除する機能を持つ

⇒決定を変更するよう要求するのではなく、欲求を変更させるという形で権力を行使することもできる

Ex. 「金をよこせ」ではなく、「金を渡すことは利益である」と信じさせるようにすれば、紛争・不満なく権力を行使できる

- ・人々の知覚、認識、選好を形成する権力に着目(潜在的争点の排除)

- ・観察可能な「潜在的紛争」

(権力を行使する人々の利益と彼らが排除する「人々の真の利益」との間の紛争)

Ex. 新興宗教の教祖は信者からお金を集めることが利益

教徒の真の利益…信用せず、お金を渡さず、脱退すること

※真の利益は想定可能であるが、確定できるものではないことに注意

③ゼロ・サム的権力観と非ゼロ・サム的権力観

※ここまでの権力観：価値の剥奪(一方が得をし、一方が損をする)

⇒ゼロ・サムの(価値の総和は変化しない)

⇔権力行使の結果として両者に価値を与え、かつ紛争を生じさせない非ゼロ・サム的権力観も存在する

* パーソンズ：機能論的社会システム論

社会システムは機能に応じて下位のサブシステムに分かれる

1. 政治システム：集合的目標を達成(=目標達成)
2. 経済システム：富を創出する(=適応)
3. 制度システム：単位相互の協力を作り出す(=統合)
4. 文化システム：単位の行為の動機を規制する(=潜在←他のシステムの根源)

…まとめて AGIL 組織と呼ばれる

⇒特に政治システムにおいて集合的目標を達成するには、権力が必要だとしている

権力：集合的システムの諸単位による拘束的義務の遂行を確保する一般的能力

集合的目標を達成するために社会の資源を動員する能力

※諸単位…各集団や個人のこと

※拘束的義務…Ex. 納税の義務など

※一般的…どのような場合でも通用する

- ・貨幣とのアナロジー：一方における権力の増加は、他方の権力の減少を必ずしももたらすわけではない

⇒経済システムにおける貨幣の役割と、政治システムにおける権力の役割を同一視している

⇒「権力も貨幣も一般化された象徴的媒体である」

：前提としてどのような場合・状況でも通用する

←もとは異なる種類の交換を便利にするための装置

- ・権力の総量の増加(非ゼロ・サム)：貨幣の信用創造とのアナロジーで考える

貨幣の信用創造…預金をいつでも払い戻す機能における銀行への信頼を前提

貨幣 VS 現金：信用創造の結果で現金<貨幣

権力の信用創造…国民による政府への信頼を前提⇒公共の利益の実現

権力 VS 実力：信用創造の結果で実力<権力

Ex. 税金を適切に運用するという信頼⇒納税につながる

Vs 実力：徴収・税務署・差し押さえ

しかし実際に国民全員から強制徴収するに足る実力は有していない

…国民からの信頼により多くの人が納税をすることを前提として、誰もが強

制徴収をされうる権力を創出する

* ハンナ・アレント

- ・権力：「人間が集まって一致した活動をする事」「共に活動すること」

「権力は個人の所有物ではない。権力は集団に所属し、かつその集団が集団としてのまとまりを持ち続ける限り、常に現れる者である。我々が誰かのことを『権力の座にいる』というとき、そこに実際に意味されているのは、彼が何人かの人々から彼らの代表者として行為する権利を付与されている、ということである。」

※国家：暴力(物理的強制力)を有し、正当化する権利を持つ点で他の集団と異なる

⇒正当化された暴力を独占する

- ・「暴力は権力の延長ではなく、政治権力の破綻である。説得と相互信頼によって共に活動する、という行為を破棄し、破綻させている。」

Cf. 人間行動の三類型

労働：生物学的な考えに基づく生命維持のための行動、日常の反復行為であって、私的な自然的行為である⇒他の動物と同じである

仕事：理念を対象化し、人工物の世界を形成する
耐久性を持った構築物を制作する非自然的行為
Ex. 建築物を作る、後世に残るような本を執筆する
←美・卓越性が行為の価値基準である

活動：(アレントが最も重視)自然や事物と孤立して退治するのではなく、複数の人々との関係性において成り立つ自発的な行為形式で、自由かつ創造的な行為
⇒それらを通じて自分のアイデンティティを実現する
⇒活動こそが政治の必要条件であり、最大条件である

原始：活動が最高次の概念：自由で平等な市民が政治を行う

産業化：仕事が最高のものになる

大衆消費社会：労働が最高次の概念になる⇒人間の生命の拡充と維持が最重要の概念になる

本来、自由で平等な市民が参加して行のが政治であり、「活動」に属していたが、大衆消費社会ではそのような政治は期待できない

⇒政治は、画一的な行動を基本とする技術的な管理業務になってしまった

※批判

- ・非ゼロ・サム的権力観は、ゼロ・サム的権力観を切り捨ててしまっている

実際は両面を具有している…人間は、集団として共同生活することを維持しながら、その一方で自由な活動を望んでいる

※政治権力が独自に有している意味

- ・アドホック(一時的)な権力ではなく、持続的な権力である
=客観化・制度化された権力である Ex. 軍隊、統治機構
- ・一定領域内に住む人々を拘束する
Ex. 一定領域内に物理的拘束力を有する
※伝統社会では、物理的強制力(=暴力)は分散していた
⇒政治権力の確立にしたがって、こういった強制力は中央に集中
Ex. 刀狩、廃刀令、絶対王政
- ・正統性(legitimacy)：支配の道徳的・倫理的な正しさ
人々が支配の正統性について了解していることが前提
- ・公共性：政治権力は、公共の利益を実現する限りにおいて、暴力の独占などを認められている

☆4 権威と正統性

(1) 権威 authority ⇒ 権限などの訳語も存在

Ex. 「あの人には権威がある」…ある人の意見や命令などを、他の人が進んで受け入れるとき

・ 権威に対する見方(以下、同じものを違う角度から検討している)

a. 現象そのもの(ハーバート・サイモン)

他人からの通信を、その内容を自身で検討せずに、しかし進んで受容する現象

←組織内部の上司と部下の関係を指すのに使われる

b. 受け手の認識(クリック)

人々が必要と認める何らかの技術を行使する能力を持つ人物に対して人々によって与えられる尊敬

c. 決定の権利・権限(あるいは能力)(パーソンズ)

一定の意思決定を行い、これによって集合体を拘束する正当化された権利

決定を受け入れる根拠にあたる

d. 主体そのもの

Ex. 「あの人は医学の権威だ」

政治権力が国民に政治決定を自発的に受け入れさせるようになった場合

・ 権力と権威：権力は、権威を身につけることにより、より安定化する

⇒強制力(実力)を行使しなくてもよい

権威がある…多数者が少数者に政治を委ねる理由になる

(※)権力がいかに権威によって自らを正当化するか…正統性の議論に

Cf. 権威主義

・ ある正統的権威が、自身を説明し、かつ論拠を提出するのを拒否すること

・ ひとつの領域でその権威を認められ獲得している人物や団体が、その権威を他のあらゆる領域にまで広げようと試みること(クリックの説明)

Ex. 1 母親から子供への理不尽な命令、2 社外での上司の部下への命令

(2) 正統性(legitimacy)：支配が倫理的・合理的に受け入れられるための根拠

※正当性、正統性は意味的に等しいが、統治にかかわる言葉としてはやはり正統性が妥当

⇒国民が支配に対して持つ信仰

①マックス・ウェーバー

支配の受け入れは物理的動機、情緒的動機だけでは不十分

⇒信仰が必要

支配の諸類型：3つの体系に類型化

・ 伝統的支配：伝統に基づいて支配が行われている⇒支配が正当である

「昔から妥当してきた伝統の神聖性と、これらの伝統によって権威を与えられた者との正統性とに対する、“日常的信仰”に基づいたもの」

Ex. ムラの長老支配：…農耕社会、農業生産に依存し、社会的流動性に乏しい社会に特徴的

⇒不変であることが重要

ここでは、先例に従って決定が行われる

⇒先例を覆す自主的な決定の余地は少ない

…支配者自身の地位が揺らぐ可能性がある

Ex1. 長老制：数人集まって、長老を中心に合議

Ex2. 家父長制：家長たる男子が構成員、財産を世襲、終身支配

Ex3. 家産制：領土や人民を支配者の所有物と考える体制

支配者の個人的な所有物としての官僚が存在する

伝統からの自由度が高く、恣意的支配が可能(絶対君主)

…近代官僚制と対をなす

- ・カリスマ的支配：支配者の超自然的・超人間的・非日常的資質が正当性の根拠

「ある人と、彼によって啓示されあるいは作られた諸秩序との神聖性又は英雄的力又は模範性に対する非日常的な帰依に基づいたもの」

Ex. モーゼの出エジプト記

支配者個人への信仰！⇒伝統的秩序を変革することが可能

宗教的指導者が典型的

ナポレオン・ヒトラー・毛沢東などもこれにあたる

カリスマ性の世襲も可能⇒漢王朝など

…この場合、伝統的支配へと変化しやすい

- ・合法的支配：法に基づいている⇒正当性の根拠

「制定された秩序の合法性と、これらの秩序によって支配の行使の任務を与えられた者の命令権の合法性とに対する、信仰にもとづいたもの」

法という非人格的な秩序に服従…法に基づいている限り支配者を選ばない

法への遵守が価値となる⇒極めて近代的な現象

…人間関係が予測可能なものとして考えられるという近代的な社会関係の特徴が前提

⇒現代社会においてもっとも多く見られる支配の体系といえる

※合法であれば民主的でなくともよい

民主的な手続きによって法が制定される⇒民主主義

非民主的であっても予測可能性のある法であればよい

民主主義…支配の根拠が国民にある

Ex. 近代官僚制：家産官僚制とは異なる近代的な官僚制

1. 規則による規律：客観的規則にしたがって業務が行われる

画一的で不透明性がない

Ex. “官僚的な対応”：官僚制の逆機能の典型例

2. 明確な権限：業務は、規則によって定められた明確な権限の範囲内で行われる

Ex. “たらいまわしの対応”：逆機能(機能に縛られる)

3. 階統構造(ヒエラルキー)

4. 行政手段の分離：公私の分離に近い

5. 官職占有の排除：売官などを禁じる

6. 文書主義

7. 任命制

8. 契約制

9. 資格任用制：一定の試験を通過したものが権利を得る

10. 貨幣定額俸給制

1 1. 専門制

1 2. 規律ある昇任制

※ウェーバーの理論への批判

- ・信仰・信念があれば支配の正統性を認める(現実にはそのような信念があることを前提とする経験的なもの)
⇒規範的な正統性の分析ができていない(正当性はこのようにあるべきだ)
- ・客観的にどの支配が正しいのかを判断する基準に欠ける(ハーバーマスら)
…国民が正しいと思っていればよいのか??

②ユルゲン・ハーバーマス

正統性の基準：正統性の基礎には社会の構成員同士の理性的な合意が必要である

⇔理性的合意が無ければ正統性は認められない

・社会的背景

1960年代～ 先進国における、国民の政府への信頼の低下

Ex. アメリカの公民権運動・ベトナム反戦運動

日本の全共闘、フランスの学生運動

☆後期資本主義における正統性の危機

前期資本主義(19c～)…自由主義的資本主義

：個々の主体は小規模で、市場メカニズムが社会の均衡を実現する

国家による市場原理の保障が正統性の根拠となっていた(近代経済学)

後期資本主義：市場の独占・寡占が進む…市場原理が正常に働かなくなる

⇒国家の市場への介入が必要になる(経済政策・福祉政策)

…国家の管理が正統性の根拠となっていく

=様々なシステムの障害を取り除くことが正統性へとつながる

国家は社会を技術によって統御していこうとする

システム統合：上記のようなシステム管理に加え、人間もシステムの一環として技術的に統御していこうとする

社会統合：自分の行為に意味づけ・妥当性を追及しようとする人間の特性を前提として、人間がコミュニケーションを通じて妥当な社会的規範をつくりあげていく

⇒システム統合の技術的側面が社会統合を脅かす…矛盾の発生

※矛盾の発生するメカニズム

政府の管理すべき障害・業務が増加する一方で、政府に対する国民の要求は増大

…「生活世界の植民地化」：システム管理の拡大⇒国民の自由な行為の領域を侵犯

⇒このような社会では人間関係が貨幣と権力によって媒介されてしまう

=人間同士のコミュニケーションが排除されてしまう社会

⇒社会的統合が脅かされてしまう=正統性の危機が生じる

Q. 正統性を回復するためには？

⇒実践的討論と理性的合意の必要

システム統合のレベルで解決する(介入などにより国民の要求に対処する)のではなく、社会統合を促進することで解決することが重要

Cf. Deliberative democracy：「熟議の政治」

ハーバーマスの意義…ウェーバーの経験的正統性への批判

Cf. サミュエル・ハンチントン：ハーバーマスとは逆の見方から民主主義の統治能力を観察

民主主義の統治能力をテーマにする

- ・ 政府機能の拡大と権威の減少⇒政府の過重負荷⇒統治能力の危機

福祉政策の充実を行うなどの出力勢力が拡大する一方で、増大した要求・利益を集約する入力勢力が衰退し、ゲートキーパーの役割を果たさなくなる

結果、政治システムが破綻を起こしてしまう

- ・ 民主主義における節度・自己規制の必要

民主主義的な方法が通用する範囲には限界がある

…個人の能力よりも、経験ある指導者の判断のほうが優秀であることもあるとする

Ex. 軍隊…司令官の指示＞構成員の判断

☆5 自由と自由主義

(自由と権力は背反するものだと思えられがちだが…)

自由の中身については様々な議論が今まで存在してきた

①アイザイア・バーリン：二つの自由(1958 年頃)

自由には消極的自由と積極的自由があるという論を提唱、その後の自由に関する論の基礎を形成

- ・自由の本質：{私の領域} に他の人や物を介入させないようにする

But 共同生活を行っている以上、他人との関係が重要になる(相対的)

＝社会的・政治的自由は絶対的なものではない

- ・自由についての2つの問い

①ある行為主体が干渉されることなく放任されるべき範囲はどこまでか

②行為主体に干渉する場合、その根拠は何か、また干渉するのは誰か

- ・消極的自由＝干渉の欠如としての自由

他の人やものから妨害されたり強制されたりすることなく、自分のしたいことを行えること

←①から導かれる自由(干渉主体が他人)

- ・積極的自由＝自己支配としての自由

何を行うか、何を行わないかを自分自身が決定し、それに自分自身が従うこと

←②から導かれる自由(干渉主体が自分)

※積極的自由は、意味変容により大きな問題を引き起こす

- ・自己の概念を2つに分裂させてしまい、真の自己(理性的な自己)が偽りの自己(情念的な自己)を支配しているのが真の自己支配(＝自由)である、という錯覚を引き起こす

⇒社会全体へ自由の意義の拡張：理性の名の下に、支配と抑圧を正当化

＝「理性的な人々」が「理性的でない人」を支配し、従わせる(自由への強制)

…バーリンは消極的自由を支持

積極的自由⇒全体主義(ファシズム)へ…価値一元論的

消極的自由⇒自由主義(リベラリズム)へ…価値多元論的

消極的自由の場合、究極的な調和の存在を否定しているので、自由を確保するために明確なルールの設定が要求される

②チャールズ・テイラー：「行使概念」としての自由と「機会概念」としての自由

行使概念としての自由：自分自身とその「生」の形態を実際に決定できること

⇒積極的自由

機会概念としての自由：様々な「生」の形態が開かれていること(提示されている)

実際にそれが達成可能かは問題にしない

⇒消極的自由

* 目的：消極的自由概念を支持する意見の否定

論理：消極的自由は、道徳的存在としての人間を無視している

…様々な欲求を前に、人生の目標を照らし合わせて道徳的な取舍選択をする

⇒機会概念として多くの選択肢があるだけで、選択によって道徳的な自己を表現できなければ真の自由とはいえない

Ex. 「今は遊びたいが、将来立派な人物になるために勉強をしよう」

③共和主義的自由(人々が国家を統治する=republic)

: 人の自由と国家の自由をパラレルに考えている

自由な人…自分の意思で自分を支配する

自由な国家…他国の支配などを受けず、自分たちの意思で自分たちを統治する

- ・自由な国家こそが、市民に対して自由を保障する

⇒自由が公共的活動への参加(政治参加)と結びつく

- ・理想は存在せず(積極的自由とは異なる)

⇒理想を前提とする支配の正当化などは存在しない点で、積極的自由と差別化

- ・消極的自由では、国家の干渉しない領域を確保する一方で、私的領域に閉じこもり公共的活動への参加を忌避してしまう可能性がある

⇒公共活動への参加を前提として自由を与えることで、消極的自由と差別化

※自由について、どの自由の考え方が正しい、という決定論があるわけではない

(2)自由主義(liberalism): 個人の自由を重んじて、絶対的な権力を拒絶する

⇒歴史的に変化を遂げてきた概念でもある(歴史的構築物)

市民階層の登場、労働者階級の出現、世界大戦の勃発 etc.

①古典的自由主義

*ジョン・ロック(1632~1704) 市民政府二論など

社会契約論

: 人間は、自然の状態においては、すべての個人は生命・自由・財産についての自然権を保持していた

⇒自然権の侵害は、自然法(神の法・理性の法)により禁じられていた

自然法では拘束力・実行力不足 ⇒制定法の必要

人々は、自然権を保証するために政治・社会を生み出す旨の社会契約を結び、政府を設立

⇒政府の権力行使は、自然権を守る限りにおいてのみ正当化される

人々は政府に対して権力を信託

…政府が契約を守らない場合、信託を取り消すことができる(抵抗権)

- ・財産権(私的所有権)の強調

財産=自らの労働によって得たものも個人の財産である、という論調

- ・個人の内面(思想・信仰など)については国家は立ち入るべきではない

⇒政教分離の原則

⇒自由主義の源流へ アメリカ独立革命やフランス革命にも影響

*アダム・スミス(1723~1790)

国家の機能: 国防、秩序・治安の維持、初等教育、最低限の公共事業

国家の機能は以上までにとどめるべき

利害は人民自身に判断させるべき

- ・神の見えざる手

「私的利益を追求する個人の自由な経済活動が自然に調和に至る」

一見自己中心的な個人の利益追求の行動が、社会的に見れば調和している

法を犯さない限りで、自由な競争が認められるべきである

⇒国家は経済活動への介入を最小限に留めるべき: 特権・規制の廃止

自由主義の基礎の概念へ

⇒自由放任(laissez-faire)へつながる

②自由主義の本質(new liberalism)

* グリーン(1836~1882)

それまでの自由主義…消極的自由(国家からの行動の規制の排除)

⇨積極的自由的な自由主義を提唱

- ・ 真の自由とは、「価値のあることを他者とともに行い、享受する能力」
- ・ 共通善…人格の成長は誰にとっても有益で、誰もが目指すことである
この共通善は、社会の他の構成員と協力して達成すべき課題である
自由とは、共通善を追求する能力である
- ・ 国家の役割…市民の人格の発展(共通善の追求)の障害を排除するために、市民生活に介入する義務がある
Ex. 初等教育の義務化、土地私有の規制
あくまでも外的障害の除去に過ぎない
市民に平等に自由を保障しなくてはならない

⇒理想的なリベラリズム: new liberalism の基礎を作った

※ J. S. ミルもリベラリズムに道徳性を持ち込んだ

個性を重視(自分自身で望ましい様式を選択する)⇒人格としての完成を目指す
…個性を育成することが人間の人格的発展にとって重要
⇒幸福が質的に深められる
個性の発展は社会の多様化につながり、社会全体が進歩してゆく

* ホブハウス

- ・ 調和の原理: 社会とは、全体が調和的に発展するような有機体
⇒国家の機能は、人格の自立的発展(共通善)に必要な条件を市民に保障すること
(ここまではグリーンの見解と似ている)
- ・ 自立的発展に必要な条件を積極的に創出しなければならない、その創出を国家に求めるのは国民の権利である
- ・ 私有財産への制限⇒「財の社会的概念」 ロックの概念に対置
あらゆる財産や富は社会的基礎を持つ(社会組織による安全の保障など)
文化遺産の相対…個人の知識・発明・労働力も社会的な基礎に基づいて生み出されたもの
投機・相続などで得られたものは課税されるべき
累進課税の概念を提唱
⇒そうやって社会で生み出された富を公共目的に使用するべきだ
⇒富の再分配を行うべき
自由主義的社会主義

※ フェビアン主義: イギリスのウェッブ夫妻により提示

社会=ひとつの生命を持つ有機体
個人の利益<社会全体の利益: 社会主義的
ホブハウスもフェビアン主義の影響を受けた

※ グリーン・ホブハウス: 福祉国家の思想的基盤になっている

* ケインズ(1883~1946)

(ケインズまでの経済主義…自由放任(市場メカニズムへの委任))

- ・ 完全雇用…自由放任だけでは達成できない
⇒国家は一定の役割を果たさなければならない: 有効需要の創出

不況の解決：政府が有効需要を創造する(投資、政府の直接雇用)

Ex. 買いオペ、売りオペ(通貨供給量操作)、利子率の操作などの金融政策、特に公共事業への投資など財政政策

⇒公共事業の発注、失業者の雇用、賃金の獲得、市場で賃金の交換(売買)、有効需要の創出という一連の流れ

以降、マクロ経済政策の管理が政府の重要課題に

・ケインズのリベラリズム=自由資本主義と社会主義の中間

政府の機能を増やすことによって資本主義社会を管理して、社会的??、個人の自由も実現する(自由に活動する条件の整備)を両立させる⇒国家機能拡大は重要

⇒自由主義は、政府による一定の介入(福祉政策、所得再分配、マクロ経済運営など)を支持
=自由放任の放棄

Cf. ベバリッジ報告(イギリス)：社会保険を中心に国民に最低限度の社会保障

⇒ケインズ主義的福祉国家の出現(ゆりかごから墓場まで、を掲げるイギリスなど)

福祉国家とマクロ経済は結びつく(??)

③新自由主義(neo liberalism)←訳語に注意

neo…昔の自由主義が新たに定義されて登場

⇒国家の介入は最低限に留めるべきだ、という意見が再登場

*ハイエク(1899~1992)

・変質した自由主義は「集産主義」と妥協、本来の自由主義を再構築すべき

・集産主義…社会全体とその資源を単一の目的に向けて組織化する思想

Ex. 社会主義=経済活動を統制(計画経済)

⇒個人の政治的・経済的自由を抑圧、全体主義へと至る

一元的な価値体系は存在し得ない=単一的な目的への合意は不可能

⇒無理に行えば独裁的な政治が現出してしまう

・市場は自生的秩序(意図せざる結果、自立的に機能)

(他には言語などもこれにあたる)

福祉国家：自生的秩序を管理しようとする⇒不可能な行為！

なぜなら、いかなる政府も市場における個々の決定についての情報を十分に把握できない

国家が財政的な危機に陥ると、潤沢な予算を前提とする福祉国家には不満が募る

Ex. オイルショックなどの 1970 年代を経て 80 年代に入ると、英ではサッチャーのネオリベラリズム、米ではレーガン政権が福祉国家批判を開始⇒先進国で影響力を持つようになってくる

*フリードマン(1912~2006)

・マネタリズム：ケインズ主義的経済政策は無効…失業率などは下がらない?⇒インフレの抑制を最優先課題として、貨幣供給量を一定にすべき

・あらゆる局面において政府の役割を極小化し、市場メカニズムに任せるべき

⇒公共事業の民営化(郵便制度など)、学校バウチャー制

☆6：デモクラシー(この授業では訳さずに用いる)

※民主的である⇒”無条件に”いいことであると考えられることが多い

では、その民主的であるということ、民主主義的であるということはどういうことなのか？という歴史的経緯を持っているのか？

(1)デモクラシーとは

語源：民衆 demos による支配 cracy

⇒価値観に深く関わるものであるため、論争を引き起こしやすい概念
(そもそも前述のように概念の定義は政治的な価値観に基づく)

①歴史的に見たデモクラシー

- ・古代ギリシャ：政体(現実の政治体制)のことをさすデモクラシー

※アリストテレスの政体論

1. 支配者が1人か少数か多数か
2. 健全な政体か、墮落した政体か(良い政治が悪い政治か)

⇒6種類の政体(王政、僭主政、貴族政、寡頭政、ポリテイア、民主政)

…民主政(デモクラシー)＝不安定・非合理的なイメージが強い

⇒(いわば現在でいう衆愚政治のイメージ)

- ・近代：理想の政治体制として理念化されたデモクラシーの登場

ルソーなどの活動

市民層(ブルジョワジー)にはデモクラシーの概念は普及せず

当時の市民層の中心的思想は自由主義

…大衆を基盤とした急進派が政治参加を要求するために利用した概念

Ex. フランス革命におけるジャコバン派

⇒今でこそ、自由主義とデモクラシーは親和的な概念だと考えられているが、

当時は対立した概念だった(階級が存在が影響?)

市民層：無知・無財産な大衆にデモクラシーを与えると自由が脅かされるかもしれないという考え

※アメリカ連邦憲法の推進派はデモクラシーに対して不信感を抱いていた

(人民の多数意志は合理的ではなく、偏見や激情によって変化してしまうので、議会にあまり大きな力を持たせるわけには行かない⇒議会での多数者が少数派を抑圧する恐れもあり⇒三権分立により抑制と均衡の原理を取り入れる)

The federalist：???

- ・19C~20C：労働者の参加が進む⇒市民層・支配者層もデモクラシーを受け入れ始める

…デモクラシーと自由主義の和解

=リベラル・デモクラシーの成立

デモクラシーの権威の確立(理想的な政治体制として)

※決定的だったのは第一次世界大戦

アメリカの参戦(ウィルソン：デモクラシーの大儀のために…)

WW I …専制国家 VS デモクラシーという図式が成立

協商国側の勝利によって、デモクラシーの権威がいっそう確立

- ・第二次世界大戦後：デモクラシーの定義についての対立

自由民主主義を掲げ、アメリカを中心とする西側諸国

VS 人民(プロレタリア)民主主義を掲げ、ソ連を中心とする東側諸国

の図式と一致(リベラルデモクラシーVS ノンリベラルデモクラシー)

Ex. 朝鮮”民主主義”人民共和国

- ・リベラルデモクラシー：議会制度に基盤をおく(自由を主要な価値観とする)

⇒複数政党制、政権交代の可能性、その前提として自由な言論・思想が保障される

- ・ノンリベラルデモクラシー：経済的な平等に基盤を置き、その実現のために資本家から権力を取り上げ、“人民”による支配を目指す

⇒前衛政党(共産党)による独裁、政権交代の可能性なし、思想・言論の自由なし

②理念としてのデモクラシー

- ・主義は本来ism=理念としての意味だけが強調されてしまう

デモクラシーには理念としての意味もあれば、現実の政体を指す意味もある

- ・理念と現実との間のギャップ

理念：全構成員が集まって決定を行う

現実：全構成員を代表して集まった議会での決定を全構成員の決定とみなす

- ・全人民による決定：治者と被治者の同一性(by カールシュミット)
- ・自由と平等を実現するもの

③制度としてのデモクラシー(理念をいかにして実現するか)

- ・直接民主制(全構成員の集合)

支持者ルソーの意見

イギリスの人民は自由だと思っているが、それは大間違いだ。彼らが自由なのは議員を選挙する間だけのことで、議員が選ばれるや否や、イギリス人民は奴隷となり、無に帰してしまう

⇒代表民主政を批判

- ・人民全体の集合によって実現される＝一般意思(公共の利益を目指す)
- ・主権＝一般意思の行使
- ・具体的にどうするか⇒人民全体での多数決が一般意思(政党を組むことは推奨されない)

※特殊意思：個別の利害を目指す

一人ひとりの意見をまとめたのは全体意思であって、一般意思ではない

(公共の利益を目指していない)

しかし、そのような直接民主制は古代ギリシャのように小規模で単純な社会構造を持つ集団でしか実現できない

⇒大規模・複雑化した社会での合意形成は難しい(間接民主制に頼らざるを得ない)

- ・間接民主制：代表制デモクラシー

一般に民主制という場合、こちらをさすようになった

※インターネットを利用した全体の意思表示を行うことによって直接民主制を実現することができる？

いくつか問題点あり

1. 決定のルール：多数決にするのか、全会一致にするのか etc.

決定ルールをどうやって決めるのかも争点に

多数決⇒多数の抑圧、全会一致⇒望み薄

2. 選択肢は誰がどう決定するのか？：権力者に都合の悪い選択肢を表示するか

(非決定の問題が浮上)

3. 単なる意見の集合が真に公共の利益になる保証はない

⇒人々の利害や意思は他からの働きかけで変化する

(2)二つのデモクラシー論(シュンペーター)

シュンペーター：経済学者「創造的破壊」資本主義は成功の末に衰退する

ベンチャー⇒大企業：守りに入る＝「創造的破壊をしなくなる」

{整理}

制度：代表者の選出⇨政治家の競争的闘争(選挙＝委託者の決定)

理念：人民による統治⇨政治家による統治

決定権：人民⇨票を獲得した政治家

①古典的デモクラシー理論

政治的決定に到達するためのひとつの制度的装置であって、人民の意志を具現するために集められるべき代表者を選出することによって人民自らが問題の決定をなし、それによって公共の利益を実現しようとする制度的装置

(←それまで主流のデモクラシー)

要約すれば：デモクラシーとは国民全体による自己決定で、選挙という便宜的措置によって代表者を決定している。民衆による統治を目標とする。

理念：人民による自己決定の政治(民衆による統治)

制度：選挙によって代表者を選出し、人民の決定を反映する

ギャップ：実際に反映できるのか？

⇒批判：制度は現実にはありえない(公益/世論)＝理念は現実性に乏しい

1. すべての人民が一致できるような公益は存在しない…人・集団ごとに公共の利益は違ってくる
＝したがって一般意思は存在しない

そもそも普通の人々が合理的な政治的判断をするとは期待できない

(経済なら多少の全体意思はありうる…市場原理に基づく)

2. 世論・共通の意思は合理性を持たない⇒非常に浮動的

政治において個人は非合理的な偏見や衝動に突き動かされやすい

世論：支配者によって作り出されたものである

政治…民衆にとっては「無責任な雑談」ではない

②もうひとつのデモクラシー

- ・政治的決定に到達するために、個々人が人民の投票を獲得するための競争的闘争を行うことにより決定権を得るような制度的装置

選挙＝どの政治家に政治を任せるかを決定する制度(＝政治家の競争)

←シュンペーターは選挙を重視：選挙に勝ったものが決定権を得る

- ・理論の特徴(上記に加えて)

- ・票の獲得闘争の存在
- ・政治的リーダーによる統治
- ・集団の役割を重視⇨古典的では個人重視
- ・経済における闘争と類似させて考えられている
 - ：完全競争、不完全競争の概念…独占・寡占の存在、非存在
- ・個人の自由：制度の前提として、競争を行うために必要
- ・政府の追放機能：再選の拒否を通じて政府の構成を統御することができる
- ・”人民の意志”を否定
- ・議会：競争的闘争の場
 - 政党：闘争において、協調して行動するために形成された集団

※シュンペーターのデモクラシーへの批判

- ・シュンペーターの理念の現実性：シュンペーター自身の価値観に他ならない
＝エリート主義的な政治を是とする彼の価値観
- ・シュンペーター理論は一見経験的理論に見える(～である！)が、
実際は規範理論に他ならない(～であるべきだ！)
- ・人々による政治参加、という理念を軽視
- ・熟議のデモクラシーの観点からも↑の批判が当てはまる
- ・公共の利益は存在しない、というシュンペーターの考え
…本当に存在しない、不要なのか？

⇒政治で実現される利益＝すべて私的な利益であるという考えにたどり着く(アメリカ多元主義的)

⇔公共の利益が無いとすれば、社会が成り立たないのは当たり前

Ex. 経済活動：市場における個人の自由な活動を通じて、自然的に社会が調和に至る

←政府は市場のメカニズム・枠組みを立法や介入によって支える必要がある

- ・公共財：非競合性と非排他性(公共経済学の理論)←政治！でも少し触れた？

非競合性…誰もが同時に利用できる

非排他性…対価を払ったものだけが使える(排他性)、ということがない

これらは市場では供給されない

⇒市場で供給されるのは、競合的で排他的なもの

※フリーライダーの問題も出てくる←政府が供給せざるを得ない

⇒市場の活動(私的利益実現の集合)だけでは実現できない利益＝公共の利益

☆7 現代のデモクラシー理論

(1) ポリアーキー(ロバート・ダール)polyarchy {政治学講義 p145~}

ダールの考え：デモクラシーという概念は混在的なので使わないほうがいい

⇒ポリアーキーという概念を導入して政治を分析

・デモクラシー：すべての人に責任を負う⇒非現実的：現実の政治現象を分析するのには使いづらい

・ポリアーキー：デモクラシーから理想・理念を取り除く

⇒現実の政治体制がどれだけ民主的か、これまでの政治体制がどのように変遷してきたかを分析

アーキー：支配(Ex. monoarchy 君主政、oligarchy 寡頭政)

ポリアーキー：訳すとすれば“多頭政”

・ダールの民主化の条件

1. 組織を形成し参加する自由
2. 表現の自由
3. 投票の権利
4. 公職への被選挙権
5. 政治指導者が票を求めて競争する権利
6. 多様な情報源
7. 自由かつ公正な選挙
8. 政府の政策を投票 or その他の要求に基づかせる権利

⇒これらは二つの理論的次元から公正される

・民主化の二つの次元

自由化(公的異議申し立て)：どれだけ政治に文句を言えるか

包括性(参加)：どれだけ民衆が政治に巻き込まれているか

閉鎖的抑圧体制：近代以前の絶対主義

競争的寡頭体制：19C イギリス立憲君主政…選挙法運動以前の時期

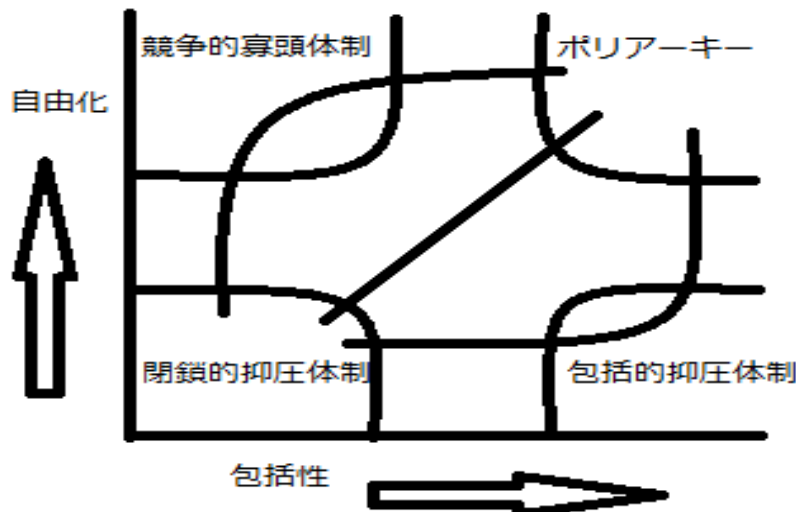
⇒競争的政治

包括的抑圧体制：ナチス、ファシズム国家、ソ連、ドイツ王政

ポリアーキー：現代の先進国など

※セミポリアーキー

4つに明確に分離できるというのではなく、セミポリアーキーのような政治体制もある



・4つの政治体制：歴史的な変遷で捉えることができる

閉鎖的抑圧体制からポリアーキーへ…3つのルートが存在

1. 競争的寡頭体制を経由：イギリスが典型例
2. 包括的抑圧体制を経由：ドイツ帝国(～ワイマール共和国)が典型例
3. 直接ポリアーキーへ：フランス革命期のフランス

・一番安定したポリアーキーの出現方法は1

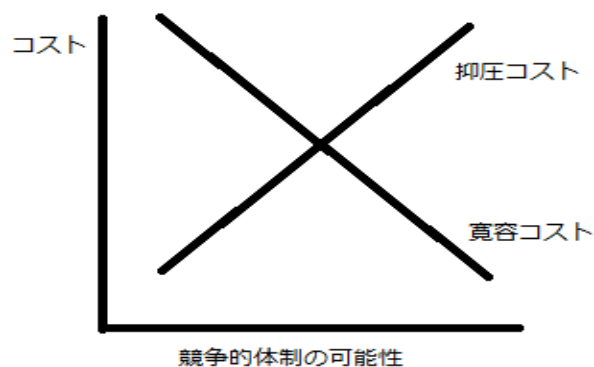
先に競争的寡頭政を経験することで、少数のエリートの中で競争的政治の規範や慣習が成熟する
⇒選挙権が開放され新しく政治に参加するようになった国民は、既成の政治的規範・慣習にすぐさま同化

※2・3の場合…政治経験のない新社会階層が政治に参加：社会階層間の対立が激化

※※日本の政治安定…戦前の日本政治が安定？

・平和的発達の場合は体制の正統性が継続する…革命的発達よりも安定

・ポリアーキーの(可能性を高める)条件



* 寛容と抑圧コスト

抑圧コスト…政府が反対派を抑圧するために消費するコスト

寛容コスト…反対勢力を政治に参加させることで消費するコスト(リスク)

⇒抑圧コストが寛容コストを上回ると競争的体制の可能性が高まる

Ex. 反対勢力を抑圧するよりも、政治に参加させて政策を実現させる機会を与えるなどの妥協をしたほうが低リスクであるといった状況

* 社会経済秩序：資源が支配層(または政府)に集中しているか、社会に分散・中立化しているか

(中立化…誰にも利用できない)

⇒政府と社会が利用できる相対的な資源の量が抑圧コストに影響

Ex. 抑圧のために政府が利用できる資源(Ex. 軍隊)が反対勢力の得られる資源に比べて小さくなると寛容に動きやすい

分散または中立化の状況では、多元的社会秩序が成立しているといえる

(⇒ポリアーキーが実現しやすい！)

・伝統的な農民社会(地主・貴族) < 自由農民社会 < 商工業社会

・GDPの高さ…ポリアーキーの可能性と比例(国民一人ひとりがどれだけ稼ぐか)

もちろんその可能性から逸脱する体制もある

経済は発展しているのにポリアーキーではない(ソ連、現代中国)

経済は発展していないのにポリアーキーが実現(かつてのインド)

* 社会経済的発展：ポリアーキーとの因果関係は？

社会経済的発展は、人々の読み書きの能力・教育・コミュニケーションを高め、それらが人々の政治参加や異議申し立てを支える。発展によって資源が分散し、多元的社会秩序が実現する(ソ連など例外もある)。また、極端な不平等を阻止することによって、政治資源の拡散的な不平等を生み出す。

※極端な不平等の存在する社会では、人々の体制への忠誠心が低くなるため、抑圧的措置を必要とする

* 下位文化・分裂形態：宗教・人種など複数存在しうるもの

多元的社会：下位文化が多元的な社会(複数の人種が存在、など)…多元的社会秩序とは異なる国民の間で重大な衝突が存在する場合、ポリアーキーは危機に瀕し、抑圧体制が成立してしまう危険性がある

Ex. ワイマール体制の崩壊

ユダヤ人敵視の風潮⇒ナチスの成立・ワイマール体制の崩壊

下位文化における対立は深刻化しやすい←下位文化自体が幼少期に確立しやすい

Ex. ある宗教のグループが政治を支配している場合、他の宗教のグループは政治に参加しにくい
(特権など宗教的利益の損失を警戒)

⇒抑圧体制のほうが成立しやすい(寛容による政治参加が実現しにくい)

…同質的な社会のほうが、ポリアーキーが成立しやすいといえる

※例外もちろん存在…スイス、ベルギーなど

⇒多元的社会においてポリアーキーが実現する条件は？

1. すべての多元的要素のリーダーが政府に参加できる⇒リーダーたちの間に協調の意思がある

2. すべての下位文化に安全保障を行う

Ex. 比例代表制の導入

3. ポリアーキーへの信頼が国民の間に存在

…この点についてはレイプハルトが詳しく説明(授業では扱わない)

* 政治活動家の信念：国民だけでなく、それを率いる政治活動家にも信念が必要

⇒下部構造によって上位構造を決定するマルクスの考えと対置

ポリアーキーの正統性：選挙の結果の尊重など

政府の能力に対する信念、他者に対する信頼

強制的競争と妥協の信念…やり過ぎない(最終的には妥協する)

信念の成立：独立変数としての信念…信念とその他の状況は関係せず、歴史の偶然性によって起こりうる

歴史の偶然性：レーニンの1つの行動をとって説明

(マルクス：こういう状況ではこういう政治が成立する、といった定型)

【用語説明編】

授業で扱った用語について、それぞれ簡潔にまとめてみました。概念を過不足無くまとめたただけなので、これをそのまま書けばいいのではなく 60 分で 3 題という指定ですから、高得点を目指す人は具体例を差し込んでみたりしたらいいんじゃないでしょうか？採用した用語に関してですが、過去に出題された語句(既出という表示がしてあるもの)を参考に、出てきてもおかしくなさそうなものを選びました。ここに書かれていない語句が出題される可能性も十分にあるので、ノートを見返すのは忘れないようにしてください。

【試験情報】(2010 年度冬学期のもの)

2/4(金) 15:05～(時間・教室は要確認。)

試験時間 60 分 3 問出題予定。用語説明問題？

去年の夏学期の様子からすると、ちゃんと書けば単位は来る様子。

【出題危険度 A 群】

【価値の権威的配分】

イーストンによる政治の定義の中で述べられた概念で、彼によると政治はある社会に対する価値の権威的配分であるという。ここでいう権威的配分とは、その社会の大部分の人によって通常、「従わなければならない」法的なものだと受け取られるような決定を指し、具体例としては法律の制定や予算の決定がそうである。これは実際の政府による政治だけでなく、政治がどこにでも存在するものという考えに基づいている。

【公共性を軸にした政治の定義】

クリックやアレント、佐々木毅などが述べた政治の定義で、ここでの政治は「公的権力によって道徳的な価値をも含む多元的な利益・価値に、受動的にまとめる調整、能動的にひきだす統合を行って公共の利益を実現する活動」である。

【イーストンの政治システム論】

イーストンが、政治をモデルとしてとらえることによって単純化し、理解を深めようとして提示した科学的な分析の理論で、外部システムとして影響しあう環境、政府とその政治体制、国民からなる政治システム、要求や支持を通じてそこへ変革・修正を促す入力装置、その結果としての政策の実現などの出力、そこから入力装置へ影響を還元するフィードバックといった各要素が相互に作用を及ぼし合うことで政治は成り立っているとしている。この理論への批判としては、政治システムの存続を重要視する保守的な概念で、独裁制すらも肯定する理論であること、システムと環境の相互関係を重視するあまりシステム自体の内部構造を考慮せず、政治体制の変化の影響を軽視していること、などがあげられる。

【政治的社会化】

民衆が、その社会で共有されている規範や価値観を習得していくこと。たとえば、投票には参加すべきである、信号は守らねばならない、など。特に、イーストンの政治システム論などで、政治システムを維持するための入力機能の一部としての一般的支持(愛国心や忠誠心)を得るために教育による民衆の政治的社会化が必要であるとされる。

【サイバネティクス論】(既出)

ドイッチュの提示した政治システム論で、あらゆる組織はコミュニケーションによってコントロールされているという観点から、そのコミュニケーションによって政治システムが自己統御を目指すとした理論。彼によると政治は権力というよりも操縦という概念でとらえるのが妥当で、負のフィードバック、特に目標変更フィードバックを経験することにより政治システム自体が自己変革・自己増強を達成するという考えは、イーストンの政治システム論の現状維持的な指向への批判を補完するものであった。しかし、その操縦を司るのはエリートであり、そこに重点を置いているため、エリート主義的だとされ、政治における権力行使の影響を軽視して

いると批判された。

【正と負のフィードバック】

正のフィードバックは、フィードバックされた情報が最初の行動を増幅し、同方向の行動を強めていく働きのこと。貧富の差が大きい国において不満を抱いた民衆を国家が抑圧した場合、さらに民衆の不満が大きくなることなどで説明できる。一方負のフィードバックは、フィードバックされた行動が最初の行動を変更・修正することを指し、目標の変更によりシステム内部の諸要素が対立を招きながら再調整されていく目標変更フィードバックと、手段を変更するが目的は変更されない目標追求フィードバックに大別される。目標変更フィードバックは複雑な学習・諸要素の対立を経験する点で自己変革がなされ、目標追求フィードバックよりも政治システムの成長に貢献するとされた。

【アーモンドの構造機能分析】

本来構造機能分析とは、あるシステムにおいて、いかなる構造がいかなる機能を担っているかを分析するという手法で、アーモンドはこれを政治システム論に応用した。彼は政治システムの共通特性として、古代の王政が様々な政府機能を占有していたが、近代民主政ではそれが分権化されていったように、あらゆる政治システムは内部に政治構造を有し、それらは政治システムが発展するに従って分化していくことを示した。その基本的構造は6つにわかれており、国民同士での相互通信や、政府と国民の意志伝達の媒介などの政治的コミュニケーションを担う「選挙民とコミュニケーションメディア」、政策の要望などの利益表出をおこなう「圧力団体」、利益表出の段階で出てきた様々な利益を統合し、一定の政策の形に集約する利益集約を担う「政党」、ルールの作成を行う形で立法を司る「議会」、ルールの適用を行う形で法律の施行や予算の執行を行う「政府・官僚制」、ルールの裁定を行う形で法を司る「裁判所」がそれである。それら6つの構造を含む政治システム全体で、国民の政治的社会化、官僚や政治家の要請にあたる補充が達成されているとしている。

【政治文化論】

アーモンドとバーバによって述べられた理論で、政治システム全体、政党などの入力対象、政策などの出力対象、そして政治参加者としての自己への関心がそれぞれあるかどうかで政治を類型化し、当時のイタリアに代表されるようにいずれの政治的对象にも関心が低い未分化型、王政ドイツに代表されるような政治システムや出力対象には関心を持つが、入力対象や自己への関心は低い消極的な臣民型、当時のアメリカなどに代表されるような自国の政治的对象全てに対して強い関心を持つ積極的な参加型などに分類した。特に臣民型と参加型の混合型が最善であるとして、市民が政治家に対して尊敬と恭順性を持つ社会を実現している当時のイギリスの社会を市民文化と名付け、政治的安定性が高いと評価した。一方で、政治文化を国民個人の意識にのみ集中し過ぎており、意識されない文化を無視していることや、類型が近代の発展課題と対応しており、旧文化は近代化とともに発展すると考えているため、アメリカやイギリスは政治的に発展しており、他国も近代化が進めばこのような市民文化に収れんしていくということになり、それが必ずしも当てはまらないことなどが批判を受けた。

【市民文化】（既出）

アーモンドとバーバによる政治文化論の中で政治的安定度が高いと評価された政治文化で、当時のイギリスがその好例となっている。市民が政治家に対して尊敬心と恭順性を持つ社会を指し、入力対象や政治に参加する自己への関心が低い臣民型と、全ての政治的对象に関心を持つ参加型の混合形態である。（もう少し綿密に書くことも可能ですがそれに関しては政治文化論の項を参考にしてください。）

【ミランダとクレメンダ】

両者ともにメリアムによって提示された概念で、権力を心理的に補強し、安定をもたらす要素として、権力の「表」に挙げられた。ミランダは、「賛嘆されるべき様々なもの」と言われたように、大衆の情緒や感情に作用する非合理的な側面を持ち、それらは記念碑や国家などのように国家の威容を示し、愛国心を向上させるものに代表された。一方クレメンダは、「信仰されるべき様々なもの」と言われたように、大衆の知性に作用する合理

的な側面を持ち、それらは政治を神による権力行使にたとえる王権神授説や、卓越したリーダーシップの最高度の表現とたとえるカリスマ的支配、多数者の意志表示とみなすデモクラシーのように、権力への服従を納得させるなどの働きをするものに代表された。

【権力の生誕と死】

メリアムの権力論の中で述べられた、権力の成立と消滅を表わす比喩表現で、権力は集団の統合現象であるとし、その成立要因を3つに分類した。一つ目は社会の諸集団の間の緊張関係が存在するときに、自集団を組織化する必要から権力が生まれるということ、二つ目は、社会に存在する様々なパーソナリティをひとつの社会へ統合するときに権力が生まれるということ、三つ目は、権力追求者や指導者たちが対立や紛争を統合・調整するときに権力が生まれるということであり、一方で、集団間に不均衡があったり、パーソナリティの調整に失敗したり、侵略をうけるなど政治社会の基本的機能の遂行が不能になるなど、社会構造の変化に権力が適応できない状態が発生した時に権力は消滅するとメリアムは考えた。

【ラズウェルの権力論】

ラズウェルの権力論は、権力そのものの分析と、権力を追求する「政治的人間」についての分析からなり、どちらも価値に注目している点で特徴的である。前者について詳しく述べると、権力を「ある行為の型に違反すれば、その結果重大な価値剥奪が期待されるような関係」と定義した。彼は価値を尊敬価値と福祉価値に分類し、多様な価値を追求する人間は、ある価値の保有(基底価値)を前提として、価値付与・価値剥奪を経ながら他人のコントロールを図り、最終的に目標とする価値(目標価値)を獲得しようとする」と述べた。

【政治的人間】

ラズウェルが示した権力論の中に登場する概念で、定義的には「個人的動機を公共の利益に置き換えて合理化する人間のこと」を指す。また、他人と比較して、特に権力という価値を重視する人間類型であるとも定義され、その個人的動機は幼少時の挫折経験(価値剥奪経験)が深くかかわっており、その経験と政治的人間としての性質によって、裕福だが淡白な家庭で育った結果人間関係の処理が極めて窮屈になり、責任転嫁をしつつ自身の権力拡大を試みる官僚向きの強迫型、親に問題を抱える家庭で育ち、他人から注目を集めることに高い関心を持ち大衆を動員するのがうまい扇動家向きの劇化型、具体例は不十分だが感情が少なく冷静で無慈悲になりやすい外交官・仲裁者向きの冷徹型に分類される。

【拡散的(非累積的)不平等】

ダールが現代の民主的社会における権力の所在を述べるときに用いた概念で、現代になるにつれて、古代は1つの大きな主体が権力を占有していた累積的不平等であったのに対し、ある資源に接近するのが有利な人は他の資源に接近するのに不利で古代のような絶対的権力は存在せず、また他の資源が必要なくなるような影響力を有する資源は存在せず、誰でもある程度の資源は有しているようになったという前提に基づいて、多様な社会集団がそれぞれ異なった範囲で限定された権力を分有している状況を指す。これは多元主義の概念と等しい。

【関係的権力観】

体制が固定的で階級的・社会的流動性が乏しい社会で多くを占める、権力を実体のあるものとしてとらえ、具体的に保持できるものとする実体的権力観の、被権力行使者の主観的イメージによって大きさが変わってくるという問題点やキャスティングボードの例による矛盾点を補完するために丸山真男が提示した権力観で、権力を具体的な状況における人間あるいは集団の相互作用によってとらえる考え方。ダールなどがこの考え方にあたり、政治権力による社会的価値の独占性が相対的に低く、コミュニケーションの諸形態が発展し、社会集団の自発的形成とそれらの間、国家と諸社会集団の間の複雑な相互けん制作用が活発に行われているような社会で多くを占める。この考え方は、立憲主義や自由民主主義の考えと結び付きやすい。実体的権力観と関係的権力観は社会状況によって使い分けられるのが望ましいとされている。

*実体的権力観の問題点を説明すると、普通の人にとって拳銃を向けられるのは怖いけど、ルフィとか孫悟空からすれば何も怖くない。軍隊も同じように解釈できる。つまり、絶対的な軸は存在しないという問題点。

【3次元の権力観】

ルークスの提示した権力観で、ダールのように、**権力を多面的にとらえ、現実の紛争に着目しながら決定作成の際の行動において行使された権力に注目**する一次元的権力観、その権力観ではとらえきれない、争点が浮上することを防ぐ**非決定作成において行使される権力**に注目する2次元の権力観につづいた。二次元的権力観も、排除された不満が苦情という形で利益表明される点で**観察可能な紛争**であり、非決定も個人の決定に基づく点で**行動論主義的**であると批判し、人々の知覚・認識・選好を形成することで、**したくないことをさせるのではなく、すすんで行うように仕向けるという形で潜在的争点すらも発生させない、権力行使される側の真の利益と行使する側の利益との間でおこる伏在的紛争の中で行使される権力**を3次元の権力と呼んだ。

【機能論的社会システム論】

パーソンズは、**社会システムは機能に応じて**、集合的目標を達成する政治システム、富を創出する経済システム、統合によって各集団・個人相互の協力を作り出す制度システム、集団・個人の行為の動機を規制して潜在的に他のシステムを支える文化システムの**AGIL 組織に分かれ、特に政治システムにおいて集合的目標を達成するには権力が必要であると唱えた**。ここでいう権力とは、**集合的システムの諸単位による拘束的義務の遂行を確保する一般的能力または集合的目標を達成するために必要な社会の資源を動員する能力**のことを指し、いいかえれば経済システムにおける貨幣のように**どのような場合・状況でも通用する、異なる種類の交換を可能にするための装置**である。その意味で、権力は一方の上昇が他方の減少を必ずしももたらすものではないという**非ゼロサムの権力観の立場**でとらえられており、貨幣の信用創造になぞらえて、実際に国民全員から税を強制徴収する実力は持たないが、国民からの信頼により多くに人が納税をすることを前提として、誰もが強制徴収をされる権力が創出されるといったような「**権力の信用創造**」が特徴的に述べられた。

【ハンナ・アレント】

政治を**公共性**という観点から特色づけた思想家で、公的領域であるポリスと私的領域である家を明確に区別する古代ギリシアを例に挙げて、政治を「**公的領域において、人々の間で言葉を通じてなされる自発的な相互行為である活動によって成り立つもの**」と位置付け、人間行動において最高位にあたる**活動という概念が政治の必要条件である**と説き、そういった意味で**権力は人々が一致して活動する(=政治)ことで公共の利益を実現するものであり、非ゼロ・サムの権力観である**といえる。彼女は**人間行為論**の中で、生物学的行為である労働、人工物の形成である仕事、そして最高次の活動を定義し、古代ギリシアは活動が中心であった理想的な政治だったが、産業化により仕事が重視されるようになり、大衆消費社会の到来によって労働が最も重視されるようになった結果、現代の政治は画一的行動に基づく技術的管理業務になり下がってしまっていると説いた。

(作者注：アレントの思想は公共性に基づくものが大半を占めていますが、授業で扱った彼女の理論は権力観を中心にしていたためこのような文章になりました。注意してください。)

【非ゼロサムの権力観】(既出)

複数の主体による価値剥奪が権利の行使であるという概念を前提とするゼロサムの権力観に対してパーソンズやアレントが掲げた権力観で、権力が関係する者全員に価値を与え、**総量が増加することもある**という考え方。特に、貨幣の信用創造とのアナロジーの中で説明され、権力は実体よりも大きな力を持ちうると主張された。

【権威主義】

母親の理不尽な子供への命令のように、ある**正統的権威が、自信を説明し、かつ論拠を示すのを拒否**すること。また、ひとつの領域でその権威を認められ獲得している人物や団体が、その**権威を他のあらゆる領域にまで広げようと試みる**こと。

【伝統的支配】

マックスウェーバーの支配の諸類型のなかで述べられた概念で、昔から妥当してきた伝統の神聖性と、これらの**伝統によって権威**を与えられたものとの正統性とに対する**日常的信仰**に基づいたものと定義される。つまり、

支配が伝統にしたがっているということ自体が正統性の根拠になり、不変であることを重要視する農耕社会において中心的であった支配体系で、先例に大きく拘束されるため支配者が自主性を発揮することは困難。具体的には長老制や家父長制がある。

【カリスマ的支配】

(略)、支配者個人の神聖性・英雄的能力・模範性に対する非日常的な信仰に基づいたものと定義される。その個人の資質に左右されるため、ナポレオンなどのように伝統的支配の変革を可能にする。これらが日常化すれば、伝統的支配(中国の古代王朝の世襲制)、合法的支配に変化していく。

【合法的支配】

支配が合法的であること自体を正統性の根拠とする考え方。非人格的な「法の価値」への信仰に基づいており、人間関係が明示的ルール制定によって予測可能なものになった近代社会でおこる極めて近代的な支配体系であるといえる。ウェーバーによれば、もっとも純粋な合法的支配は、官僚的行政幹部による支配である。

【近代官僚制】

ウェーバーの提示した合法的支配の典型とされる官僚的支配の概念的基礎をなす制度で、君主の財産として定義された家産官僚とは異なり、規則による拘束、権限の明確化、ヒエラルキーの内包、行政集団の分離(公私の分離)、文書主義、売官などを禁じる官職占有の排除、任命制・契約制、一定の試験を通過したものだけとなる権利を得る資格任用制、貨幣定額俸給制、専業制、規律ある昇任制などを特質として持つ。

【ハーバーマスの正統性】

1960年代のアメリカの公民権運動、ベトナム反戦運動や、フランスの学生運動などを例に挙げて、先進国において国民の政府への信頼が低下していることを述べ、それを背景として、ハーバーマスは正統性の基礎には社会の構成員同士の理性的な合意が必要であると説いた。特に、19世紀以降の前期資本主義(自由主義的資本主義)では個々の主体は小規模で市場メカニズムが社会の均衡を実現していたため、国家による市場原理の保障が正統性の根拠となっていたが、市場の独占・寡占が進み市場原理が正常に働かなくなってきた後期資本主義においては経済政策や福祉政策などによる国家の市場への介入が必要になってきたと説き、国家が様々なシステムの障害を取り除くことが正統性の根拠となっていくと考えた。一方で、政府の管理すべき障害が増加する一方で国民の要求も増大していくと、システム管理が拡大しすぎて国民同士のコミュニケーションを阻害・排除してしまい、正統性自体が脅かされてしまうという矛盾も主張した。そうならないためには、熟議の政治のように、国家の介入による解決だけでなく、実践的討論や理性的合意を通じて国民同士が妥当な社会的規範を作り上げていくことも重要であるとした。

＝正統性の危機には権威の増大ではなく人々の合意形成で対処すべき

【熟議の政治】

デモクラシーの中でも特に、代議士やエリートだけでなく、一般の市民たちをも主体とした討議を目指し、その討議を通じて各参加者が自分の意見や利害をかたくなに主張し押し通すことではなく、他の参加者の意見を真剣に受け止め、自己の意見や判断を見直すことを目的としたもの。その点で、人々の意見や利益の集積であるという従来のデモクラシーの定義とは異なっている。また、討議のルールに関しても、参加者間の合意形成のために、情緒的発言や偏った思考は排除し、理性的な思考と発言を必要としている。また、この熟議の政治という考え方は、代議制デモクラシーや政党政治などの従来のデモクラシー制度を否定するのではなく、お互いを活性化させるとして相互補完的な関係でとらえている。

【サミュエル・ハンチントン】

民主主義の統治能力をテーマにして、正統性の危機に対して権威の増大ではなく人々の合意形成で対処すべきと唱えたハーバーマスとは反対に、人々の政治参加を抑制し、権威の増大によって対応すべきであると説いた。具体的には、1960年代のアメリカは公民権運動などのように政治参加が拡大していったが、一方で政府や大統領の権威は減少していったとし、入力装置が衰退して要求のオーバーロードが起こり、これが統治能力の危機

をもたらしたとした。よって民主主義が通用するところには限界があるとして、時には経験ある指導者のほうが合理的な判断をもたらさうことを、軍隊を例にとりて説明し、国民の政治参加の節度・自己犠牲を求めた。
＝政治システム論になぞらえて説明するならば、利益集約を行う装置が縮小すると政治がコントロールしにくくなるから、要求もうすこし自重しろということを書いたかった。

【アイザイア・バーリン】

自由についての2つの問いをたて、そこから自由を2つに大きく分類した。この考えは、後の自由に関する議論の前提となった。1つめは、ある行為主体が干渉されことなく放任されるべき範囲はどこまでか？という疑問で、この問いから、干渉の欠如としての自由、つまり誰にも妨害されたり強制されことなく、自分がしたいことを行えることという消極的自由が定義された。2つめは、行為主体に干渉する場合、その根拠は何か、干渉するのは誰か？という疑問で、この問いから、自己支配としての自由、つまり、何をどのように行うか、何を行ってはならないかを自分で決定し、それに従うことという積極的自由が定義された。バーリンは其中でも前者の消極的自由の考え方を支持した。というのも、積極的自由は価値一元論と結びついて、自己が分裂した結果理性的な自己が情念的な自己を支配しているのが真の自由であるという錯覚を引き起こし、それが社会に拡大して理性的自己支配を目指す人々がそうでない人に対して自由の名のもとに強制・抑圧状態を正当化する全体主義などにつながると思ったからである。一方で消極的自由は価値多元論と結びつき、多様な価値に応じて自由の範囲もルールで定められるべきだという風に自由主義につながると思った。

【チャールズ・テイラー】

積極的自由に近い概念として、自分自身とその生の形態を実際に決定できることという行使概念としての自由と、消極的自由に近い概念として様々な生の形態が開かれていることという機会概念の自由を唱えた。しかし、消極的自由を指示するバーリンとは違って、道徳的存在としての人間を重要視し、人間は様々な欲求を抱える中で自らの目標に応じて優先順位をつけたり、取捨選択したりする目的志向的存在であり、価値について道徳的な選択を行うことで自己を表現すると思った。その意味で選択肢があるだけの機会概念にはそれが欠如しているとして批判した。

【共和主義的自由】

自由な人間と自由な国家を同一の枠でとらえようとする理論で、バーリンのいう消極的自由は、人々が私的領域に閉じこもってしまい、公共的活動への参加を忌避する可能性も持つとし、政治権力確立のための公共的活動(選挙など)への参加が個人的な自由を確保することにつながるという理論を掲げた。自己支配を行うという点で積極的自由と似ているが、何らかの道徳的理想を含む積極的自由に対して、共和主義的自由は、そこに理想は存在しないので自由の名の下での強制や抑圧は現出しえない、という点で差別化されている。

【古典的自由主義】

現代の自由主義の理論的源流で、ジョン・ロックの社会契約論や、アダムスミスの神の見えざる手などがそうである。ジョン・ロックは、生命・自由・財産について自然権を規定し、それらは自然法で守られているとした。そのうえで、それらを保障するために人々は社会契約を結び政府を設立するのであり、自然権を守る限りにおいて政府の権力行使が正当化され、そうでない場合は抵抗権を行使できるとした。またロックは労働の成果であるところの財産も固有のものとする私有財産権を重視したことで特徴的で、また政教分離の原則に代表されるような内面的自由の尊重を唱えた。この社会契約論は自由主義の源流となり、フランス革命やアメリカ独立革命などに影響した。またアダムスミスは、国家の機能を国防・司法・初等教育・公共事業に限定し、私的利益を追求する個人の自由な経済活動は自然と調和に至ると考えて、正義の法を犯さない限り個人の自由競争を認め、あらゆる特権や制限を廃止し、経済活動への政府の介入を最小限にとどめるべきだと述べた。この考えは自由放任主義として後に知られるようになった。

【ニューリベラリズム】

古典的自由主義に続いて、国家の役割と言う観点に着目して変質したのがニューリベラリズムである。グリー

ン、ホブハウス、ケインズが代表的論者で、以下それぞれについて説明する。

【グリーン】

バーリンの提示した2つの自由のうち、これまでの自由主義で主張されていたのは消極的自由に近いと述べ、彼は積極的自由に基づいて自由主義をとらえようとした。彼にとっての真の自由とは、価値のあることを他者とともに行い享受する能力で、人間の究極的価値基準は人格であり、人格の完成こそが最高善であると考え、またそれは利益対立が生じないことから普遍的な共通善であると説いた。この共通善の達成のために構成員同士が協力する必要があり、このための努力も真の自由に当てはまると考えた。よって、国家は本来共通善を促進するための制度であるので、市民の道徳的人格の発展の障害を除去するために、初等教育や飲酒制限など市民生活に介入していくべきだとした。

*グリーンの意義=自由主義の目標に道徳的理想を持ちこんだ(人格の完成)

【ホブハウス】

彼によると、社会生活の理想とは倫理的調和の実現であり、社会全体にとっても人格的発展は共通善であるとしてグリーンの意見に同調した。加えて共通善の追求は公共の責任であると同時に個人の義務・権利であると説き、国家はそれを達成するための個人の自律的能力をはぐくむための条件を保障する必要があるとした。この意味で積極的国家という概念を提示した。さらに、グリーンとの相違点として、外的障害の除去だけでなく、私有財産への一定の規制も伴うことを述べ、財の社会的概念を提示したことがあげられる。ここでは、あらゆる財産や富は社会によって保障されているので個人だけに属するものではなく、よって個人の努力によらず社会的基礎により得られた富は、累進課税などを通じて社会に還元され、再配分されるべきだとされた。

【ケインズ】

自由放任主義を批判し、ニューリベラリズムの考えを具体的な政策で提示した。自由放任主義には調和する保証が存在せず、国家の介入は常に否定されるべきものではないと考え、不況期には政府の介入政策による有効需要創造が必要だと説いた。この結果、自由資本主義と社会主義の中間の理論としてケインズのリベラリズムが成立し、政府の機能を増やすことで資本主義社会を管理しながら社会的利益・個人の自由を実現するという、政府の一定の介入を支持する形の自由主義の体系が出来上がった。

【ネオリベラリズム】

ニューリベラリズムに対し、初期の自由主義をもとに新たに定義されたリベラリズムのことを指しており、つまり国家の介入を最低限にとどめるべきだという主張が再登場したことを意味する。ハイエクは変質したリベラリズムを、社会全体とその資源を単一の目的に向けて組織化する集産主義であり独裁制を生み出しうると批判し、一元的な価値体系は存在しえないし、市場は言語などのように意図せざる結果を持ち自立的に機能する自生的秩序だから管理するのは不可能だと述べた。管理のための潤沢な予算を必要とする福祉国家は財政危機に陥ると国民の不満を募らせやすいとした。またフリードマンはマネタリズムという概念を導入し、ケインズ主義的な経済政策は意味がなく、インフレの抑制を最優先として貨幣供給量を一定にするべきだということ、あらゆる局面において政府の役割を縮小し市場メカニズムに任せるべきだということを主張した。実際に、オイルショックなどの70年代を経てイギリスではサッチャー政権が、アメリカではレーガン政権が成立して福祉国家を批判、小さな政府を標榜した政権の、市場メカニズムへの委任が先進国で進んだ。

【アリストテレスの政体論】

古代ギリシアにおいてアリストテレスが政治を分析する際に用いた理論で、そこでは政治は支配者数と健全度により6つの政体に分類できるとされた。支配者が一人の場合、健全だと王政、不健全だと僭主政になり、支配者が少数の場合、健全だと貴族政、不健全だと寡頭政になり、支配者が多数の場合、健全だとポリティア、不健全だと民主政(デモクラティア)になるとした。この中ではデモクラシーは不安定・非合理的で衆愚政に近いものだと考えられていた。またもっとも良いとされたのが王政で、最も悪いとされたのが僭主政であった。

【リベラル・デモクラシー】

デモクラシーは本来ジャコバン派ら大衆を基盤とする急進派のような勢力が自らの政治参加を求めるために用いた言葉であり、自由主義を基調とする18~19世紀の社会では支配層からは反感を持たれていた概念であった。つまり当初デモクラシーとリベラリズムは対立概念であった。しかし、19世紀以降各国で民衆の政治参加が進展すると支配層もデモクラシーに妥協・受け入れていくようになり自由主義とデモクラシーは和解した。この結果生まれたのがリベラル・デモクラシーである。この考え方はデモクラシーを三遷理由として掲げた第一次世界大戦でのアメリカの勝利によって権威を持つようになり、第二次世界大戦後も西側諸国で採用された。そこでは議会制度に基盤がおかれ、複数政党制や政権交代の可能性などが認められた。

【ノンリベラル・デモクラシー】

20世紀後半を経てデモクラシーは確立したが、その中身についての議論が東西対立で浮き彫りになった。西側の自由民主主義に対抗する概念として定義されたのが東側諸国のノンリベラル・デモクラシーで、そこでは経済的平等実現のため資本家の権力を否定し、人民による支配が目指され、そのためには労働者階級による前衛政党(共産党)が独裁権力を握るべきであるとして複数政党制や政権交代の可能性などは否定された。

【シュンペーター】(既出)

シュンペーターはデモクラシーの理念を代表民主制において実現することは可能かについての考察を行い、2つのデモクラシーについての理論を提示した。1つめは古典的デモクラシー理論で、ここでいうデモクラシーは国民全体による自己決定で、選挙という便宜的措置によって代表を決定しており、政治決定の権利は人民にあり、民衆による統治を目標としている。シュンペーターはこのような古典的デモクラシーを、公共の利益は個人・集団ごとに異なるので全ての人民が一致できる公益は存在せず、したがって唯一の公益を前提にする一般意志は存在しえないこと、また世論の浮動性をみればわかるように政治において個人は非合理的な偏見や衝動に突き動かされやすく、合理的な判断はできるはずがないことなどを挙げて批判し、2つ目のデモクラシー理論として、選挙は政治家による個人の票の獲得競争であり、政治決定の権利は票を獲得した政治家にあり、これは政治家による統治を目指すものであるという理論を提示した。この理論を他に特徴づけるものとしては、経済における競争とのアナロジーでとらえて独占・寡占の存在などを想定していること、再選の拒否を通じて政府の構成を人民が統御できるという追放機能を内在すること、人民の意志を否定していること、議会を競争的闘争の場に、政党を協調して行動するために形成された集団に位置付けていることなどがあげられる。一方でこの理論は、エリート主義的な彼の価値観を反映したものにすぎないことや、実際は規範理論にすぎないこと、熟議のデモクラシーの主張を無視していること、公共の利益を否定すると、政治で実現される利益は全て私的な利益であるというアメリカ多元主義的な指向にたどり着き、それでは社会が成り立たなくなってしまうこと、誰もが同時に利用でき(非競争性)、対価を払わずとも利用できる(非排他性)という性質を持つ公共財を供給できるのは政府だけであることから私的利益実現の集合だけでは実現できない利益も存在することなどから批判された。

*普通に考えて800字超えんですが、過去問に出てきています。60分で4問だったのに…

【ポリアーキー】

ダールが提示した政治体制、または政治的分析手段を指す。デモクラシーは理想の政治体制と現実の政治体制の二つの意味を内包するので、この混乱をさけるために、ダールはデモクラシーを理想の政治体制を表わす概念として再定義し、新たにデモクラシーから理想や理念を取り除いたポリアーキーという概念を導入して現実の政治体制を分析する手段として使用した。これにより民主政の程度を客観的に測定できるようになった。ダールによると、政府の行為に影響を与える機会がいかに関与しているか(Ex. 複数政党制)を示す自由化(公的異議申し立て)の次元と、政治体制にどれだけ多くの国民が包括されているかを表す包括性(参加)の次元の度合いによって政治体制は分析でき、両者の次元が満たされている状態がポリアーキーであると考え、そこに至るまでの政治体制を3つに分類して経緯を整理した。近世ヨーロッパの絶対主義国家のように包括性が低く自由度も低い状態を閉鎖的抑圧体制と呼び、また選挙権拡大以前のイギリスのように政府に反対する勢力は存在す

るが選挙権はまだ拡大していない状態を競争的寡頭体制、ファシズムのように選挙権は大多数の国民に与えられているが政府への反対は弾圧されるような状態を包括的抑圧体制と呼んだ。これらの体制の歴史的展開についてもダールは言及し、フランス革命のように閉鎖的抑圧体制からポリアーキーへと昇華する経路、ドイツ帝国からワイマール共和国に変遷するドイツのように閉鎖的抑圧体制から包括的抑圧体制を経由してポリアーキーへと進む経路、選挙権を拡大していったイギリスのように競争的寡頭体制を経由してポリアーキーへ進む経路などがあげられ、先に競争的寡頭体制を経験することで少数のエリートの中で競争的政治の規範や慣習が成熟し、政治参加の範囲が拡大しても民衆が同化しやすいイギリスのようなパターンが理想的な変遷であるとした。

⇒ポリアーキー単独で出題すると答えが尋常じゃないくらい長くなる(800字)ので、包括的抑圧体制といったように途中の政治体制を聞いてくる可能性もあります。注目しておいてください。そのままポリアーキーが出てくれば上の概念を要約すればいいと思います。

【寛容と抑圧コスト】

ポリアーキーの成立を高める条件を考える際に根底をなす考え方で、簡潔に言えば反対派を抑圧するか政治に参加させる(寛容)かのバランスに各要素が影響しており、寛容に傾けばポリアーキーが成立しやすいということ。その各要素とは、資源がどのように配分されているか(中立化されていたり、分散していればポリアーキーに近づく)や、社会がどこまで発展しているか、GNPが高いかどうかなどである。この要素は、人々の知能が高まり、資源が分散(拡散的不平等)すれば政府による抑圧の可能性が低くなるという理論に基づいて定められている。

【多元的社会】

宗教や人種など、下位文化と呼ばれる文化が社会に多数存在している社会のこと。下位文化は幼少時に確立しやすいため対立が深刻化しやすく、深刻な対立が存在する社会ではポリアーキーは危機に瀕する。なぜならば、ある下位文化のグループが政治を支配している場合、彼らは他の下位文化のグループが政治参加することにより特権などが失われることを避けるために抑圧という手段を選択する傾向にあるからである。具体例としてはワイマール共和国がユダヤ人敵視の風潮によって動揺し、ナチスというユダヤ人抑圧体制を生み出したことなどがあげられる。

【歴史の偶然性】

ダールが述べた概念で、「このような状況ではこのようなものが成立する」といったように定型的に歴史や政治体制をとらえたマルクスの考えに対置する概念で、レーニンのひとつの行動が歴史に影響を与えたことを例にとって歴史は偶然性を持つと主張し、ポリアーキーを実現するためには、政治家たちが歴史の偶然を認めなければならないとした。

【出題危険度 B 群】 没になった用語説明…

【ガブリエル・アーモンド】…下の2つの理論を説明したほうが良い？

あるシステムにおいて、いかなる構造がいかなる機能を担っているかを分析する構造機能分析の手法を政治システムに取り入れ、以下の主張を述べた。まず、あらゆる政治システムは同一の機能を遂行するとともにその内部には必ず構造があり、システムの発展に伴いその構造は分化していく。近代化に従って政治構造の機能は限定されていく。またアーモンドはバーバとともに政治文化論を唱え、政治システム全体、政党などの入力対象、政策などの出力対象、そして政治参加者としての自己への関心の度合いによって政治を類型化できるとし、イギリスのように民衆が政治家に対して尊敬と恭順性を持つ社会を市民文化と名付け評価した。

【ポリアーキーの可能性を高める条件】

資源が支配層に集中しているか、分散しているか、誰も利用できないように中立化しているかという状況に応じて政府と社会が利用できる相対的な資源の量などが影響して、政府が反対派を抑圧するためのコストよりも

政治に参加させることによる不利益のほうが低リスクの場合、ポリアーキーが成立しやすい。特に、資源が中立化・分散している場合では多元的社会秩序が実現されているとされ、ポリアーキーが成立しやすくなる。また社会形態が近代的であること、GNPが高いこと、したがって社会経済的な発展がなされており識字能力やコミュニケーション能力が高まり政治資源が拡散的な不平等の状態になっていることがポリアーキーを促進する要素となる。また、宗教などの下位文化が同質な社会のほうが成立しやすく、対立のある多元的社会では抑圧体制に進みやすい傾向があるが、その対策としては、全ての多元的要素のリーダーが政府に参加でき彼らが協調の意志を有していること、全ての下位文化が安全を保障されていること、ポリアーキーへの国民の信頼があることがあげられる。また、ダールはポリアーキー成立のためには国民だけでなく政治活動家にも信念が必要だと説き、選挙結果を尊重するなどポリアーキーの正統性を認め、政府の能力や他者を信頼し、競争の中にも妥協を持ち、信念とその他の状況は歴史の偶然性のように独立変数であることを掲げた。

【クリックによる政治と政治学の定義】

クリックは政治を定義するに当たって、公共性を重視し、ある社会の構成員全員に影響するものとして政治をとらえた。彼によると、政治学とは「社会全体に影響を与える、利害と価値をめぐる紛争についての研究であり、それをどうすれば調停できるかについての研究」であり、政治とは、「与えられた統治単位内の諸利益の対立を、それぞれの利益が共同体全体の福祉と生存に対して持つ重要性に応じて、権力に参加させつつ、調整するところの活動」である。

【政治と行政】

行政学は政治学の一要素である。主体に着目すれば、政治とは、公選職である政治家による活動または政治家で構成されている機関の活動であり、行政とは、任命職である官僚または官僚で構成されている機関の活動である。機能に着目すれば、政治は諸利益・諸価値の調整や統合、実際には政策の決定を行い、行政はその結果を政策の立案、執行、統制することにより実現するといえる。

【官僚優位論と政党優位論】

官僚優位論は、政官関係において明治期以降からの体制が継続しているため官僚が有利であるとする理論で、政党優位論は日本型多元主義論とも呼ばれ、特定の政策分野に精通する族議員が関連官僚との連携を図るといった活動をすることで官僚より政党が有利であるという理論だが、実際には官僚が作成した原案に一定の修正を加える点で官僚の活動を基盤としており、実際に政党が優位にあるわけではないとされる。

【権力の技術】

メリアムの権力論の中で述べられた概念で、権力を行使するには必要な技術があるとされた。支配者は社会についての正確な知識を持ち、報酬をそれぞれの集団・個人のサービスの度合いに応じて与え、主張に固執せず賢明な妥協をすることが必要である。また権威が過度に集中することを防ぎながら、個人を集団に統合させてパーソナリティの内的統合を実現するなど正義を貫くことによってリーダーシップを具体的に示し、人間の行動を予測可能なものにする秩序を維持しながら均衡を確保するという正義と秩序の均衡も求められるとした。メリアムは、大衆に対して自己犠牲の精神を引き出し、命令を実現させるためには利他主義を身につけていなければならないとも述べた。

【政治権力が独自に有している意味】

一時的ではなく、持続的な権力である。つまり、軍隊や統治機構のように客観化・制度化されている権力である。また、一定領域内に住む人々を拘束する。伝統社会では、領主という言葉が存在したように物理的強制力は分散していたが、廃刀令などのように、強制力は近代化に従って中央へ集中化されるようになった。また人々が支配の正統性について了解していることが前提で、公共の利益を実現する限りにおいて、暴力の独占などを認められている。

【権威に対する4つの見方】

サイモンは、権威を他人からの通信をその内容を自身で検討しないにもかかわらず進んで受容する現象そのもの

のとしてとらえ、特に組織内部の上司と部下の関係を指摘した。また、クリックは受け手の認識と言う観点で権威をとらえ、人々が必要と認める何らかの技術を行使する能力を持つ人物に対して与えられる尊敬であるとした。またパーソンズは、一定の決定意志を行い、これによって集合体を拘束する能力または正当化された権利であると考え、決定を受け入れる根拠になると述べた。権威を主体そのものとしてとらえる見方も存在した。権威は権力が身につけることによって安定化するための道具であり、いかにして権威を身につけるかが正統性の議論の対象であると言える。

【フェビアン主義】

イギリスのウェッブ夫妻により提示された自由主義的社会主義概念で社会をひとつの生命を持つ有機体としてとらえ、そこでの利益は個人の利益よりも尊重されると説いた。ニューリベラリズムを説いたホブハウスもこの考え方の影響を受けた。

*もちろんフェビアン主義がこんなに少ない字数で説明できるわけではないのですが、授業で扱った範囲に絞ってこのような答えにしました。

【理念としてのデモクラシーと制度としてのデモクラシー】

理念としてのデモクラシーは全構成員が集まって決定を行うことである。これは治者と被治者の同一性としてカールシュミットも言及しており、ここでは自由平等を実現するものとされている。しかし、現実には代表民主政として、代表して集まった議会での決定を全構成員の決定とみなしている。これをルソーは批判し、多数決によって決定された人民全体の集合体の意志が一般意志であり、それが主権者で、その実現のためには民衆が政党に参加せず個人として政治に参加する必要があるとした。しかし現実には不可能で、代表民主政が採用されざるを得ない。そこで全人民による決定という理念の実現が代表民主政において可能かどうかを考えたのがシュンペーターであると言える。

【用語概略】

・価値の権威的配分

イーストン、法則的、法律や予算、政治はどこにでも存在

・イーストンの政治システム論

単純化、入力、要求、支持、決定者、体制、政治的共同体、出力、フィードバック、環境、保守的、体制変化を軽視、独裁制肯定

・サイバネティクス論

ドイッチュ、権力は操縦、コミュニケーション、コントロール、正と負、目標変更、目標追求、自己増強、エリート主義的

・構造機能分析

アーモンド、いかなる構造がいかなる機能、分化、同一、補充、政治的社会化、政治的コミュニケーション、利益表出、利益集約、ルールの作成・実行・裁定

・政治文化論

アーモンド、バーバ、入力、出力、システム自体、自己、未分化、臣民、参加、市民文化、恭順性、尊敬心、意識されない文化、収れん

・ミランダとクレメンダ

情緒、非合理、威容、愛国心、知性、合理、権力への服従に納得、王権神授説、カリスマ的支配、デモクラシー

・権力の生誕と死

緊張関係、組織化、パーソナリティ諸類型、権力追求者・指導者、調整・統合、不均衡、基本的機能遂行不可能、社会構造の変化

・ラズウェルの権力観

価値、重大な価値剥奪、尊敬価値と福祉価値、基底価値と目標価値、コントロール

・政治的人間

私的目的、公共の利益、合理化、幼少時、劇化、親に問題、扇動家、強迫、裕福だが淡泊、人間関係、官僚、感情、冷徹、仲裁者・外交官

・拡散的不平等

ダール、権力の所在、古代、集中、累積的、ある資源、必要なくなる、誰もが、多様な社会集団、異なる範囲、限定、多元主義

・関係的権力観

固定、乏しい、実体、マルクス、具体的に保持、主観、キャスティングボード、丸山真男、相互作用、ダール、独占性、コミュニケーション、相互けん制作用、立憲主義や自由民主主義

・3次元の権力観

ルークス、多元的、現実の紛争、政策決定、非決定作成、苦情、行動論、選好、潜在的争点、伏在的紛争、真の利益

・機能論的社会システム論

パーソンズ、集合的目標、政治システム、富、経済システム、統合、協力、制度システム、根源、文化システム、AGIL 組織、権力、拘束的義務、一般的能力、資源を動員、どのような状況、貨幣、非ゼロサム、権力の信用創造

・アレント

公共性、ポリス、家、政治、公的領域、自発的、活動、必要条件、権力、活動、公共の利益、非ゼロサム、人間行為論、労働、仕事、活動、産業化、大衆消費社会

- ・権威主義

正統的権威、拒否、他のあらゆる領域

- ・伝統的支配

日常的信仰、支配が伝統にしたがっている、不変、農耕社会、先例、自主性、長老制、家父長制

- ・カリスマ的支配

支配者個人、非日常的、伝統的支配の変革、日常化

- ・合法的支配

合法的であること自体、非人格的、法の支配への信仰、予測可能、近代的、官僚的

- ・近代官僚制

ウェーバー、家産官僚、規則、権限、ヒエラルキー、公私、文書、占有、任命、契約、資格、定額、専業、昇任

- ・ハーバーマスの正統性

1960年代、政府への信頼、理性的合意、前期資本主義、小規模、市場、市場原理の確保、独占・寡占、介入、障害の排除、コミュニケーション障害、矛盾、熟議の政治、実践的討論、理性的合意、妥当な社会的規範

- ・熟議の政治

一般の市民、自己の判断を見直す、意見や利益の集積、ルール、理性的は思考と発言、相互補完的

- ・サミュエル・ハンチントン

民主主義の統治能力、政治参加抑制、権威の増大、政府や大統領の権威、オーバーロード、経験ある指導者、節度・自己犠牲

- ・バーリン

干渉の欠如、妨害・強制、消極的、自己支配、何を行い何を行ってはならないか、積極的、価値一元論、自己分裂、理性的自己、情念的自己、錯覚、抑圧、正当化、全体主義、価値多元論、自由主義

- ・テイラー

行使概念、機会概念、道德的存在、自己を表現

- ・共和主義的自由

人間、国家、私的領域、公共的活動、参加、自由の確保、道德的理想

- ・古典的自由主義

ジョンロック、社会契約論、自然権、保証、正当化、抵抗権、私的財産権、政教分離、自由主義、アダムスミス、国家の機能、私的利益、調和、正義の法、廃止、介入、自由放任主義

- ・ニューリベラリズム

国家の役割、グリーン、ホブハウス、ケインズ

- ・グリーン

人格、最高善、共通善、努力、真の自由、障害を除去

- ・ホブハウス

倫理的調和、人格的發展、共通善、同意、公共の責任、個人の義務・権利、自律的能力、積極的国家、私有財産、財の社会的概念、累進課税、再分配

- ・ケインズ

自由放任主義、具体的、保証、需要創造、中間、資本主義社会を管理、介入を支持

- ・ネオリベラリズム

最低限、ハイエク、単一、組織化、集産主義、市場、自生的秩序、潤沢な予算、不満、フリードマン、マネタリズム、インフレの抑制、貨幣供給量、縮小、メカニズム、サッチャー、レーガン、小さな政府

- ・リベラル・デモクラシー

大衆を基盤、支配層、反感、対立概念、妥協、第一次世界大戦、第二次世界大戦、西側、議会、複数政党、政権交代

- ・ノンリベラルデモクラシー

東西対立、経済的平等、資本家の権力、人民、労働者階級、共産党、独裁、複数政党、政権交代

- ・シュンペーター

代表民主制、古典的、国民全体、便宜的措置、民衆による統治、公益、世論、非合理的、政治家による票の獲得競争、政治家、政治家による統治、独占・寡占、政府追放、人民の意志、議会、政党、エリート主義的、規範理論、熟議の政治、公共財、アメリカ多元主義的、私的利益実現

- ・ポリアーキー

理想、現実、客観的、ダール、デモクラシー、自由化、野党、包括性、閉鎖的抑圧体制、競争的寡頭体制、包括的抑圧体制、経路、フランス革命、ワイマール、イギリス、少数のエリート、規範や慣習が成熟、民衆が同化

- ・寛容と抑圧コスト

反対派、資源配分、社会経済的發展、GNP、拡散的不平等

- ・多元的社会

下位文化、幼少時、危機、特権、ワイマール、ユダヤ

- ・歴史の偶然性

ダール、定型的、マルクス、レーニン

- ・ポリアーキーの可能性を高める条件

資源、支配層、分散、中立化、コスト、多元的社会秩序、近代的、GNP、識字能力、政治資源、拡散的不平等、下位文化、同質、多元的要素のリーダー、協調の意志、安全保障、国民の信頼、政治活動家の信念、ポリアーキーの正統性、政府の能力、歴史の偶然性、独立変数

採用した用語一覧…どれだけ説明できますか？

【A 群】

価値の権威的配分
公共性を軸にした政治の定義
イーストンの政治システム論
政治的社会化
サイバネティクス論(既出)
正と負のフィードバック
アーモンドの構造機能分析
政治文化論
市民文化(既出)
ミランダとクレメンダ
権力の生誕と死
ラズウェルの権力論
政治的人間
非累積的不平等
関係的権力観
3 次元的権力観
機能論的社会システム論
ハンナ・アレント
非ゼロサム的権力観(既出)
権威主義
伝統的支配
カリスマ的支配
合法的支配
近代官僚制
ハーバーマスの正統性
熟議の政治
サミュエル・ハンチントン
アイザイア・バーリン
チャールズ・テイラー
共和主義的自由
古典的自由主義(既出)
ニューリベラリズム
グリーン
ホブハウス
ケインズ
ネオリベラリズム
アリストテレスの政体論
リベラル・デモクラシー
ノンリベラル・デモクラシー
シュンペーター(既出)

ポリアーキー

寛容コストと抑圧コスト

多元的社会

歴史の偶然性

【B 群】

ガブリエル・アーモンド

ポリアーキーの可能性を高める条件

クリックによる政治と政治学の定義

政治と行政

官僚優位論と政党優位論

権力の技術

政治権力が独自に有している意味

権威に対する4つの見方

フェビアン主義

理念としてのデモクラシーと制度としてのデモクラシー